薔薇獄少女

亜麻音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薔薇獄少女

【Ｎコード】
Ｎ４９５７Ｘ

【作者名】
亜麻音

【あらすじ】
突如歌舞伎町に現れた
連沢新羅奥平翠羽奥平蒼琉（つれざわしんら おくひらすいう おくひらそうる）とある事件をきっかけに、万事屋メンバーは彼女等が真選組に所属していると知る。
だが彼女等は…。

“プロローグ”

―外は、とてもどんよりとした天気
―灰色の雲は、
手を伸ばせば触れられそうなくらいの厚い雲―

ハッ……ハッ…

なんで……？

こんな……。

どう…して―？

―ある“　者”は血に染められた屍…屍屍屍…
屍の海の真ん中で佇む―
辺りを見回しても、何処を見ても、屍の海は続く…。
何が…あったの…？
皆…　　どうし…て動か…ないの？
ガクッと膝から崩れ落ち
これは夢じゃないの？と
頭を抱える――
―誰が…　こ…んなことを

酷す…ぎる―

どうし…て　　私だけが…残ってるの？

殺……し…たい。

色々な喜怒哀楽の感情が頭のなかを廻る―

……えっ
あれ…？
なんで喜・楽？

私、なんで喜んでるの？
なんで楽しんでるの？

こんなに…憎くて憎くて
今すぐ殺したいくらい…
憎いはず…なのに…？

自分の…中で、この状況をこの現実（今）を
愉しんでい…る自分が居るかのよう―

あっ…そっかこういうのを

“　狂ってる”って
いうのか―

そっか
私狂ってるんだ―

次第に口はどんどん横に
開いていき…
ついにはハハハ…ハハ…と笑いだす―

するとさっきまで
いなかったはずの前方に人影が見えた。
屍を我が物顔で踏み付けながらこちらに近づいて来るのが見える―

そこには…
女が一人…

そして
異様なほどの笑顔を向ける

アナタハ…

ワタシ…と同ジ…。

同…じ…？

ケイヤク……シマショウ…ワタシト…

契約―？

ソウ　ソウスレバ

アナタハ…。

“プロフィール”（前書き）

少し修正しました。

“プロフィール”

～プロフィール～
（オリキャラ）と
（ローゼンメイデン）

※ローゼンメイデンの説明は本文にて出て来ます。

―連沢　新羅―
（つれざわしんら）
身長：１６４，７？
年齢：１９歳
特徴：肩より約６？ほど伸ばしたグレー色の
ストレートヘア。目の色は黒とごく普通。
真選組隊長服を着用しているが、ズボンではなく、太もものちょい
上までの黒いスカートに
黒のピンヒールブーツ。
腰には刀剣が刺さっている

―奥平翠羽―
（おくひらすいう）
身長：１６１．８？
年齢：１６歳
特徴：髪は
腰まで伸ばした

茶色のクルクルツインテール。右目が碧色。左目が赤のオッドアイ。
新羅と同じ服装。腰には刀剣が刺さっている

―奥平蒼琉―
（おくひらそうる）
身長：１６０，８？
年齢：１６歳
特徴：青色のショートヘアで右目が赤色。左目が碧色のオッドアイ。
浴衣を少し改造し動きやすいように工夫している。
黒いピンヒールブーツ
クナイをいくつか持ち歩いている。

浴衣の色は、青と濃い紫を掛け合わせたもの―。
　翠羽の双子の妹。
真選組とは全くの無関係。

女ってたまに何考えてるか分からなくなる（前書き）

グダグダのガダッガダ小説になるかもですが
どうぞ
お手柔らかに
お願いします
では
オープンっ！（＾＾）！

女ってたまに何考えてるか分からなくなる

＊

―時は秋――

夏の暑中が終わり、
少し肌寒くなってきた頃合い―多くの人々が季節の
変わり目を感じ衣更えの支度をしている――。

紅葉で色鮮やかに染まる
木々達を、よそに
今日も歌舞伎町は、
人・天人で溢れ返っている

――いつもと変わらぬ平凡な生活が一変するなんて
誰も予想つかないまま―

「あー―疲れるぜ…なんで初っ端から定春の散歩？？てか何このシチュエーション！！
主人公としてありえねーだろっ！普通、主人公といえば海賊船に乗って「海賊王に俺はなるっ！！」とか、
「真実はいつも一ぉつ！！」とか「かーめーはーめ…」
「「は」なんて言わせねぇーよ！！
てかなんで他のアニメの名台詞言ってんだよっ！！」

見た目はぽっとしないがツッコミが取り柄の新八。外が寒いせいか口からは
白い息が出ている

「そうネっ！こんなアニメ出方考えるほうが負けネ。他のアニメの台詞言うほどこのアニメは甘くないアル

「まだまだネ」。

「お前も他のアニメ引っ張ってきてんじゃねぇーかよっ！」

そんな会話を聞きながら、のんきにあくびをする定春はのこのこ歩いている。

すると―、

「ワンワンワンっ！ワン！」

「！」なんだ定春、

イイメス犬でも見つけたのかっ！」

定春の鳴く方向に銀時は目を向ける…

「……？

……？って！！え……」

「っま……さか」

二度見する銀時。

「どっどうしたんですか！銀さんっ！」

「天パっ！何かあったアルか！」

銀時の額に汗が垂れる―

「あれ…はまっま…さかの

今日っ…て……

ジャンプの発売日じゃねぇかよぉぉぉー！」

「そっちかよっ！！」
新八と神楽はがくっとずっこける。
「いきなりシリアスムード突入！かと思ったらそういうことかよ。何紛らわしい行動とってんだよ！
てか良くこっからジャンプの表紙みえるよなっ！！此処から約２５？はあるぞ！！それと定春急に止まんな。お前が止まると後ろの人に迷惑かかんだよ！」

振り返ると、約１５人弱の人等が冷ややかな目でこちらを見ているとりあえず頭を何度も下げて謝り、道を譲った―

あっ！言い忘れてた！新八がツッコミを言い終えるとゼーハァゼーハァと
息をあげた―にしても

よく一つも噛まないでツッこめる。それはツッコミと眼鏡の長い付き合いのせいか。（作者ぁぁぁぁっ？）

「新八ぃー！！お前は眼鏡＝新八だがやれば出来る奴だと思ってたぞー！だからおめぇーらは、定春の散歩を続けてろー！！」「それ褒めてんのか

けなされてんのかわかんねぇんだけど！って何自分だけ楽しようとしてぇんだよ僕だってお通ちゃんのＮＥＷシングル買い…」「駄眼鏡少し黙るヨロシ！いつまでも乳臭いコト語っ点じゃねーヨ。

だからお前はいつまでたっても新八なんだよ！なんだよ「八」って！

私「八」より「一」派ネ」

「神楽ちゃん…さっきから言ってるけど他のアニメ引っ張り出すの辞めにしよ。てか僕が新一ｋに適うとでも思ってるの？「思う訳ねぇーだろ！ぶっ殺すぞ！」

「神楽ちゃん…毒舌」

「まっあんな甘党ヤロー

ほっといてさっさと帰るあるヨ。あっ帰ったら「渡る世間は鬼しかいねぇコノヤロー」見なくちゃいけない」アル！　定春早く帰ろう！

「わんっ！」

すると神楽は定春にちょこんと乗りスタスタと行ってしまった。

「…駄目だ。さっきから色んなテレビのタイトルやなんやかんや出し過ぎてる…。

泉ピ〇子Ｓすみません…」

新八はこちらに向かって深く頭を下げた。

「さて僕も行こう……

……

…

あれ？」

前進した身体を数歩後ろに戻す―

新八は少し疑問を抱く。

「銀さんの入ったコンビニ毎日毎日客が多いのに今日はやけに人いないな…てか人ほぼゼ…」

「新八…！間違った駄眼鏡ー！！早くするアルヨ！」

ブンブン手を振る神楽―

「……」

「僕の名前は新八じゃわーーー！！！」―新八は大大声でそう発しながら神楽達の元へ走っていく。新八の声は雲一つのない晴天の空に余韻を残し

そのまま静かに消えていった―

―〃〃――〃〃――〃〃―

新八が疑問を抱いてたなか銀時は満面の微笑みでコンビニの中にはいる―。

「ジャンプージャンプっと……いい年こいてジャンプなんて…とか言ってる奴

あいつらぜってぇジャンプの良さわかっちゃいねぇー「少年ジャンプ」とか言っちゃってるけど実際少年以上におじさん向けもあるからね。特に「ＴＯＬＯＶＥる」とか
あれ何歳でも読んでも平気なやつだよ。９だの１３だの年齢制限やってるから餓鬼がイっちゃってる世界に、Ｌｅｔ'ｓ　ｐｅｒｌｙしたくなるんだよ。あんなのＦＵＬＬＯＰＥＮにしときゃ餓鬼が卑猥なコト考えずに平和に暮らしていけんだよ。まっ銀さんは外見がおっさんでも心が少年だから少年！ジャンプ読んでも
大丈夫だけどねー！」
と独り言を言いながら雑誌等に目もくれずジャンプ、ＳＱ、マガジンなどと
ずらっと並んでる前にびしっと立つ。

「ジャンプの今日の表紙はトリコ…か。悪くねぇ」
ジャンプに手を伸ばす―

―カチャっ…

何かが頭の後ろに突き付けられる。

女ってたまに何考えてるか分からなくなる（後書き）

新）？？？

神）なんだよぱっつぁん
何キレてるアルか？

銀）お妙にまた
ダークマター
食べさせられたんだとさ
その副作用で作者に
八つ当たりしようとしている最中らしいぜ！！

新）変な言い掛かりは
やめろよ！！

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？（前書き）

今回のサブタイと本文全然関係ありません。

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？

「おーおー多串くんか。
何君もジャンプ買いにきたの？
あっ！君はマガジン派だったか。駄目だなぁ君はまだまだアマチュアだ。てかマヨラーっていう存在だけでもうアマチュアだよね。いやアマチュア以下だよねもうヘタレヤローだよね！つーか鬼の副長と恐れられてる人がマヨラー！？
まるで、夜にラーメンを食べる人略してマヨラーの間違いじゃなくて？

片手にジャンプを持ち、手の空いてるもう片方の手で耳をほじくりながら振り返る。

「俺はジャンプでもマガジン派でもない―。」

「盗み屋派だ…！」

そこには銀時に拳銃を向ける男が二人いた―「えっ…」尋常じゃない汗がダラダラと頬をつたう―辺りを見ると、コンビニの店員４人、高校生くらいの女子３人、スーツ姿の男２人、お婆さん１人、に黒づくめの男たちが拳銃を突き付け座らせている―それに

タバコを加えグラサンを
かけたおじさん―
金のなさそうなそのおじさんはホームレス生活でもしていそうな…
いやしているひとがそこにはいた―

見た目どおりまるで駄目なおっさん……略してマダ…ってただの長
谷川さんじゃねぇかよっ！！
なーにやってんだあの
おっさん！！てか何ラフにパンツ一丁で拳銃突き付けられてんだよ。
何顔赤らしめてんの！
Mだよあの人Mだよ―

声に出したいが、この状況で言うわけにもいかず
心の奥深くでツッコむ
ツッコむツッコむ！！

「おい何してる―さっさとそこに座れ」
銃を突き付けられながら人質が集う場所に座らせられる―皆とても
ビクビク怯えている―隣のパン一のヤローを抜いてわ…。

（ッチなんだってんだよ！なんでこんな展開っ！初っ端から定春の
散歩させられるわ
変な黒づくめのやつらに銃向けられてフラグは立つわ主人公として
かっこいいところ何もみせてねぇーじゃねぇかよ！）

…
「あっ銀さんじゃん。こんなところで何してんの？」

「何してんのってどう考えても銃突き付けられて今にも頭ぶち抜かれそうな感じだろ見てわかんねぇーのかバッキャロー！
てか長谷川さん何その格好？なんでパン一？

黒づくめの男たちに聞かれないように
コソコソ話で長谷川さんに問う―
「いやぁーネクロゴンド
からここまで帰ってくるのに7日かかったんだけど
パンツびしょ濡れでさぁ…それに帰ってくる途中鮫の大群に襲われてパンツ破かれちゃったしコンビニで仮のやつ買おうと思ってここ寄ったんだけど結果こういうハメになっちゃったんだぁ」
「あーだからパンツそんなに破けてんだね。まあもう半分フルチン状態だけどさ…。躯喰われなかった分
有り難く思ったほうが良いよ。
ホントホント」

見ると色がハゲたトランクス＋半分モザイク状態の下半身がそこにはいた

「まぁな後、ネクロゴンドに行ってきたお土産
「まる子も大好きになる
お菓子」略してマダオあるんだけど…食べる？」
「結局お菓子の名前もマダオなんかいっ」
「味覚絶品！ネクロゴンドマミューダパオ味だけど…」
「味の問題じゃねぇーんだよ！！良く見てみろこの状況！！こんな状態で呑気に食う暇あるなら今頃この重苦しい牢獄（コンビニ）から抜け出してるわ？
てかんな得体の知れない
食い物食えるわけねぇだろう！」
「おいそこ静かにしろっ！殺されたいのか」

―カチャッカチャ
銀時と長谷川さんに向けて黒づくめの男達が一斉に
銃を向ける―
「ちょっ…ちょっと
待って下さいよ先輩方ー俺達撃っても何も得することないですって
？あっ！でも
隣の人（長谷川さんに）に
撃ったら
ホームレスになった時の
生き方の知恵など得ること出来ますよ☆〃」
「ちょっ銀さんっ！！何俺を盾にさせようとしてんの！…そんなだ
ったらこっちの銀髪の人撃ったほうが得ですよ！撃った瞬間、コイ
ン出て来たり、アイスフラワーやファイアーフラワーとか出て来て
技使えたり、スター出て来たら、スーパーサイヤジンよりも無敵に
なれますよ★〃」

「おいおい長谷川さーん！あんた何言っちゃってんの撃たれてコイ
ン出て来るなんて聞いたことないんですけど！何パックンフラワー
に喰われて財布？だけじゃなく頭の中のコインまで空っぽになっち
ゃった？」「そういう銀さんこそ何その頭！塩でも振り掛けたの？
だからそんなに白いの？
あっ！もしかして
アイスフラワーに凍結されちゃったの？成る程！」
どうりで人よりも遥かに
煌めいてると思ったよ！
俺、マジ髪に神がいるかと思ったよ！！」

「何ソレダジャレ！寒いよ寒いよ！あんたは、死ぬまで末永く「ダンボールの神様」でも聞いてろ！」

「クッパに炎吹かれて
髪チリチリ＋タマ無くなっちまえ」「……？
タマ無くなれってどういうことだぁぁぁ！！俺は、死んでもタマとタマで闘わせられたり、ボックスドライバーに変えられたりするのはもう御免だぁぁー」

アニメ・原作などを見てた人なら分かると思うが、銀時の股間はリアルワールドではあまり使いどころはない。だが股間をいじるギャグを何度も生み出すことで笑いの神様を拝むコトが出来た！そう…この銀魂（世界）は“股間”というキーワードで成り立ってい…

「るわけねぇーだろ！」そんなこ汚ねぇ汚物なんぞでこの世界が成り立ってるわけねぇーだろ！！

確かにこのアニメは普通のアニメとは違い、餓鬼には聞かれちゃまずい台詞も多々発している。視聴者からの苦情の電話で何度打ち切りの危機にあったか記憶に残らねぇほど山ほどあった。だが一人でも多くこのアニメを見ていただけるよう汗水垂らして頑張ってきた俺達の苦労！そんな汚物ごときにとられてたまる…

亜麻音
「はいはい終了終了ー！！金玉か銀魂かう○こか
○○○か知んないけど早く先進めてくれませんか？前の前書きで「オリキャラ出て来ます！」って
宣言しちゃったのに、こんなコンビニの中で
眠気が覚めるようで覚めないようなゆるい話が終わらないとい～つまでたっても先進まないんですけど！さっさとピリオド打っちゃってくださいよ！」

「ちょっと作者ーあんた何してくれてんの！俺今良いこと言ってたよね？最後シメようとしてたよね？俺やっと主人公としてカッコイイとこ見せられるふ陰気…てかそういう空気だったよね？」

「私…空気読めない女なんで！」

「何“きまった”みたいな感じになってんの！何も決まってないからね！そういうやつクラスに一人か二人いるよね！俺ああいう子苦手なんだよねとか周りから言われてる系だよね」

亜麻音

「まあともかくそういう訳だから…。んじゃ後よろしく！あっ！あと一応忠告しとくけど、

くれぐれも撃たれないように♪んじゃまたねー☆」

すると作者は光の速さで飛んでいき、キラッと星が

一つ光ると、何も見えなくなった―

「あー？何なんだよたくっ！あっ！

長谷川さんいたんだ」

「なんで！今までずっと

話してたじゃん！

なんで急に存在消されてんの！」

「冗談だよ冗談！

あっ！先輩方すみません…大変長くお待たせいたしまし…」

―バァン！

――外は晴天…。
中は曇天の状況のなか―
　曇天の空は雲一つ晴れることもなく激しい雷雨が降り続いていた。
そこに集う者に予想したくもなかった最悪の光景を見せながら―

「花より団子」とか、それ結局自分が食べたいからじゃなくて？（後書き）

作者がキラッと光りって所は、ロケット団の奴でも思い浮かべて下さい。

後最後の曇天ってところはコンビニの中のことです。
てかコンビニの中で雨ふらねぇし…とか思ってる人はそこはスルーでお願いします。

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応１００％スマイルで振り向け（前書き

今回は銀さん達はでてきません…

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応１００％スマイルで振り向け

「まぁだいたいこういう帰ってこない日はパチンコ
行ってる日が多いけど、定春の散歩の途中だったから財布持ってっ
てないと思うんだよね。あったとしてもジャンプ代くらいしか持っ
てってない思うんだけど…」

「だったらコンビニ強盗にでも捕まってるんじゃないアルか。それ
かもうコンビニの中で銃で撃たれて
死体となっているか。」

小指を鼻の穴にいれほじくりながらそんな冗談のよいで冗談じゃな
いコトを言う

なぜなら今さっきコンビニの中で一つの銃声の音が鳴り響いた
からだ―。

「ハハハっ冗談も対外にしてよ。神楽ちゃん」―いやだから冗談じ
ゃないって！
もしかしたら、みんなの
銀さんマジガチで屍になってるかもしれないよ！主人公ご愁傷様っ
てなっちゃってるかもよ！

「そういえば！この時間帯って「渡る世間は鬼しかいねぇコノヤロ
ー」の再放送やってるアル。駄眼鏡
リモコン取るアル！」

「だからその駄眼鏡ってやめてくんない？」
「いいからさっさと

リモコンよこせよ。私よりろくにグッズ出てないくせに…。」
「んなっ！！それ気にしてたのに…！てか今関係なくね？」そう言いつつ自分の隣にあったリモコンを神楽に手渡す。神楽はリモコンの電源を入れると「渡る～渡る～」と意味のわからない歌を唄いながら、チャンネルを回す―

「おーちょうど
ぴったしネ♪」

―オープニング―
～てれれれれれれん
てれん　てれれれれれ…　てれ…　「ニュースＥＤＯ～
先程こちらに入ってきた情報をお伝えします…。中継が繋がっているようです。

「なんだよっ！オープニング聞けないじゃないかアル」

…では現場にいる
結野アナ！結野アナ！

……はい現場の結野です。先程こちらのコンビニで
強盗事件が起こりました。そのあとたまたまこの
コンビニに居合わせていた客を人質に捕ったようです犯人は
「人質を返してほしくば、金を１億用意しろ」との請求を求めてきました。
数々の
警察達が説得を求めても一向に動きを見せず
手の施しようがなく、真選組への出動命令も今さっき発動された所

です。

一体この事件はどうなるのでしょうか？
そして人質は無事生きてあのコンビニから出てこれるのでしょうか？
また新しい情報が入りましたら、お伝えします。
以上　こちらからの中継でした―…
「はい結野アナ！ありがとうございました。
くれぐれも気をつけて下さい。え～それではまた新しい情報が入りましたらお伝えいたします」

ニュースＥＤＯが終わると「だってそんなこと言ったってしょうがないじゃないか」と○ナリが発していた。
だがそんな名言を発している○ナリにも目もくれず、向かい側に座っている、
新八と顔を見合わせ、しばし時間が経った―
そして新八は
ハッ！と思いだす
「まさか定春…。あの時コンビニに向かって鳴いてたのはジャンプの発売日のことを教えてたわけじゃなく…あそこに犯人がいるぞって知らせようとしてたんじゃ…」

「じゃあ…銀ちゃんは今頃…。」

「……。」

ダッダッダッダッダッ

バタンっ！

鍵を閉め忘れたことも気にせず
ただ…
“目指す場所”へと走る―

（銀さん…今助けに…）
（銀ちゃん…今助けに…）

二人の思いが重なった今―

救いの神は
微笑むか―

それとも―？

知らない人に自分の名前を呼ばれても一応１００％スマイルで振り向け（後書き

オリキャラいつ出て来るのか自分でもわからない…。

占いのラッキーアイテムって必要なさそうで実は幸運の持ち主（前書き）

やっとのことで、オリキャラ参上っ！！

占いのラッキーアイテムって必要なさそうで実は幸運の持ち主

〜ｉｎコンビニにて〜

“バァン―”

一つの銃声が鳴る―

銀時と長谷川さんはそれぞれ死を覚悟していた―目を開ければそこには見たこともないエンジェル達が俺を連れてあの世にいくのではないかとそんなことを思いながら…。

だが心のどこかでは

（銀さんが撃たれろ―）

（長谷川さんが撃たれろ―）

と反面思っていたかもしれない―

―　両手で体を軽く摩り
　撃たれた場所を探す―

……
……
……あれ？

ゆっくりと目を開け自分の　体に視線を向ける…。
そして瞬きを2、3回する。両者二人共―

撃たれてなどいなかった―血が一滴も垂れておらず
痛みっすら一つもなく…

彼等は、生きていた喜びを言葉や身体で表現するのではなく
ハァーっ…と息を垂らして喜びを表現した―

だが安心している暇など
ない―

　だったらさっきの
銃声は一体…？

たまたま

弾が入ってなかっただけか？

それとも　外れただけ？

否、ターゲットを変えたのか？

だったら誰に…？

イッイヤ…イヤァ…」

「！！」声がした方に体を向ける…

そこには…

高校生くらいの女性がもう一人の高校生に体を揺らされていた―

見るかぎりその女は

ただ体を揺らされ続けているだけで微動だにしない…

ピクリとも動かず…

身体を激しく揺らしながら大声をあげ呼び続けている声にも応答せず―

「ちょっ…先輩方…？なっ何して…」

「あーぁ可哀相にな…お前等が騒ぎもしなかったらその女は身代わりにならずに済んだのによ…。全てはあんたらの失態が招いた結果だよ…。」

今だに銃口からは灰色の煙が薄々と出ている―
女を撃った黒づくめの男は銃口に向けて、フッと息を吹き込むと灰色の煙は、サーッと静かに消えていった―

「サナっ…サナ…起きてよ死んじゃいやだ……！」

「サナ」という名は多分撃たれた少女の名前だろう…。
少女の友達は必死にその娘の名前を呼び続ける…。
無駄だ…。と
分かっていながらもその娘は少しの『軌跡』を信じながら…

「…たらっ
だったらなんで…なんで俺達を撃たなかった！どうして罪のない人間を撃つ必要がある！」
―銀時は、黒づくめの男達に鋭い目をやる―

「あぁっ？お前自分が撃たれなかっただけ有り難さを営め。変わりにその女が身代わりになった…。ただそれだけだ…。」黒づくめの男は、顔は少し微笑みながら、そして呆れたかのように発する―

「というか…。あんたらが騒いだせいで外は仮装パーティー会場に変わってるぜ…。ましてや警察（マッパ）までもがこんなに群がってるたぁ
俺達ぁこんなところで　　捕まる訳にはいかねぇんだよ…。
どうせてめぇら逃がしても被害者としてマッパにとっ捕まえられ聴衆され…
あげく俺達は、牢獄行きだ

そうなる前に…」

カチャ―

カチャ―カチャカチャ…

「あんたらも…すぐさま

息のね止まらせてやっから安心して逝ってくれよ…
…今ならあの女とでも会えんじゃねぇのか？」　クスクス…笑いながら、黒づくめの男達は人質（銀時含め…）に向けて、銃を向ける―

銀時は、「洞爺湖」と描かれた木刀をギュッと握りしめる…が相手は拳銃を持っている…ましてや自分が動けばまた犠牲者がでるということを想定し、ただ黒づくめの男達を睨むことしか出来ずにいた…。何もできない自分に唇を噛み締め手汗が滲むほど木刀を握りしめたまま…

「ではでは皆…さん」

カチッ…

―引き金を引く

「未来でまた……

会えたら…」

……

誰もが死を覚悟した…

―銀時と長谷川さんは二回目の死を覚悟して

―だが…

次は本当の死を――

「……だ」

「あっ…？」

「死ぬのはてめぇーら

だぁぁぁぁぁぁ！！！」

耳を塞ぎたくなるような声をあげたほうに視線ごと体を向ける―

そこには…

さっきまで、「サナ！」と
名前を呼び続けてた高校生があの時とは、嘘のような顔つきをしていた―
瞳孔は開き、ずっと見ていれば今にも殺されそうな顔をしていた。
てかもうもはや、
鬼の形相と呼んで良いほどの―
―すると
いつのまにか何処から取り出したか知らないが
その高校生の手にはバズーカが抱えられていた―

（まさか……？この状況ってまさかのまさか…）皆が、口に溜まっていた唾を飲む―それが合図のように

バゴォォォォォン！！

コンビニは屋根ごと吹っ飛ばされ、黒づくめの男達は皆、外に放り出された―。
銀時達は、黒づくめの男達とは逆の方向に居たため、　なんとか命だけは免れた
だが
銀時等は、顎が外れたかのようにポカーン…開いた口がなかなか塞がらない…。第一何故、高校生がバズーカなんぞ危なっかしい道具

を持ってるんだ―？
　というのが、
疑問だっだ―

一方その女は、モクモクと茶色い砂煙が出ている所をシルエットを見せながら歩いていき、砂煙から出て来る時に　姿をあらわにした。

「たくっとんだ茶番に付き合わされたです！」パンパンっと服についた砂を払い落しながら

「ちょっと新羅っ！！いつまで屍、気取りしてるつもりですっ！何が「サナ」ですか！！偽名も冗談もほどほどにするですっ！こんな長い芝居討ってあげたんですから給料６０％翠羽に渡すです！」

（えっなっ何…？
この娘？芝居とか言ってるけど…？サナ…？偽名？
って…まさか
……この女…）

ゆっくり首をその『サナ』という死体…に向ける…！

「……ちょっと…バズーカだけは使うなって言ったでしょ…！いくら威力が１／３だからって警察がコンビニ全壊してどうすんのよ！
それに給料６０％なんてあげれるわけないでしょ…
あんたこそ冗談ほどほどにしなさい」

死体が話した…ましてやむくっと起き上がる

―コンビニの中の人々は、（アァ…アァァ）
と絶句した…と声が震える…

そして、すぐに立ち上がり、銀時達のすぐ横を通りすぎる…。
死体だったものが…

「全く～？今日の占いは
１２位だって言うから、たまにはラッキーアイテムでも信じてみようかなと思って見てたら、『フライパン』
って書いてあったたから、お腹にしまっといたけど、まさか
フライパンのおかげで命拾いするとはね…。」
スッとお腹から出すと、

さっきまでのポッコリお腹とは裏腹
とてもスタイリッシュなバランスの良い体型になった―

フライパンには、確かに、銃弾が当たった後が

はっきりと残っていた―。そのフライパンを小さい円を描くようにクルクルと回しながら、今だ絶えることなく出ている砂煙をくぐり抜け、ふて腐れ顔で待っている高校生のもとへ向かう―

「貴様等…何者だ…。」

バズーカが放たれた時に熱風が黒づくめの男達をとり囲み
そのまま男達を晴天の空の下へと追いやる―

その衝撃で身体が痙攣し動けずいた男達はその二人組の高校生を下から睨みつける―

「あーそっか…。これからあんたらを
牢獄(あそこ)に放り投げる最、名前も知らない人にやられちゃ
虫の居所が悪い
ものだしね…！
自己紹介しといたほうが良いかもしれないわね…」

赤と黄色のチェック柄スカートのポケットから、スッと小さな手帳を取り出し、
バッ！　と片手でその中身を男達に見せる―

「はじめまして諸君等…
つい最近、新しく『隊長』として任命された

真選組四番隊隊長

連沢新羅…っと」

ちらっと横に視線を送る―

……

…ハァーっと

一つため息をついてから

「同じく『副隊長』として新しく任命された

真選組四番隊副隊長

奥平翠羽…ですぅ…」

言い終わるとその高校生…否、真選組四番隊隊長

連沢新羅は

「よろしくっ♪」

とニコッと威勢の良い声と満面な笑顔で

自己紹介を終えた―

占いのラッキーアイテムって必要なさそうで実は幸運の持ち主（後書き）

コンビニ篇は終わりです！

次からは、本編？らしいのが始まります♪

インスピレーションが素早く働く人ってなんか素晴らしい

「ばっ…馬鹿な！！真選組は男しかいない武装警察の集団のはずだ！！女が所属してるなど聞いたことがない！第一、女が『隊長』などに任命を任されるなど以っての外！お前達のような女がこの俺達…いやましてや攘夷志士などを捕らえられるわけなっ…
グジョブゥ！！」

一人の男の顔は顔面から一瞬にして地面に埋め込まれた―
その翠羽という女の足に操られるかのように―

地面はメキメキ…と痛々しく悲鳴をあげるも、翠羽はそんなことお構いなしに男の後頭部にローファーを履いた足を乗せ地面へ誘う―

「女女女女…うっざしいです。」「ヴグゥっ！」さらに足に力を加え、男の後頭部が見えなくなるくらい地面に押し付ける―

「女舐めたら、怖いですから！」

フフフ…と優しく

黒い微笑みをする彼女はまさしく…サドっ！
　皆がゾゾゾっと鳥肌が
立つくらいに―肌で実感した

「翠羽…ほどほどにしなさい。それ以上やったら本当に死ぬわよ。
それ」

それと指差すのは地面に
　押し付けられている男のことだった。
　確かに、地面に押し付けられている状態なのだから

その男はまともな空気を取り入れられる訳もない。
　虫の息ほどにしか
してないのは事実。

「……新羅がそこまで言うなら……少しは手加減しても良いです。」
　少し力を緩めた。
だがけして、足を退けた
わけではなく、まともな空気を吸える程度に…。

「そろそろ、あの人等も来る頃じゃない？

あの人等…？あぁ…真選組のこと…。

と、新羅の顔を見て、頷く

「ほら、もう少しの辛抱です。牢獄に入る覚悟は出来てるんでしょうね…。」

黒づくめの男達に聞こえる程度に声を出す。その声は男達を脅迫するかのように

男達の身体は今だに痙攣しているため、逃げようにも逃げられずにいた。牢獄に入る準備は万全だ。

一人除いては…。

「クククッ…俺達はてめぇーらマッパに捕まる訳にはいかねぇんだよ……」

「ハッ？」声のする方に身体は動かさず、視線だけを送る。

黒づくめの男達は全員身体が痙攣していて動けずにいたかと思っていたが、

その男だけは、身体は動けずも、手首だけは動かしていた。そしてすぐ傍にあった銃を新羅へと向け…

「あばよ…」

と言い残し

二回発砲した

その一部始終を見ていた、結野アナ達も、声に出せずにその映像をテレビに映させてることしか出来なかった。

男は勝ったとでも思ったのだろう。

男の額には「勝利」　という文字が浮かんでいた。

だが

「無駄ですぅ…」

ポツリ…と呟く。
そして視線を前に戻す―。

「いっておくけど、新羅…」

「！！！！！」

皆、またまた顎を外す…。

なんせ、新羅は明後日の方向に身体を向けながら、
フライパンを持っている
手とは逆の手で

「こんなんで、命落とすほどヤワじゃないですから！」

人差し指と中指の真ん中に二つの銃弾をしっかりと
挟んでいたのだから―。

「アッアァ……アッ…！」
銃を構える手が震える…。

新羅は、振り向き
間に挟めた銃弾を男に微笑みながら見せる。

そして、その銃弾をフワッとスロモーのように投げ、ガシッと素早
くキャッチする。「翠羽…。」

「はいっ♪」
威勢の良い声で振り向く

「その男…。私が管理しとくから貴方はこの男に“女の恐さ”というものを思い知らせてあげなさい♪」
バチッ☆とウインクしながらとんでもないことを発した。

「アイアイサーです♪」

二人は、持ち場を交換し、翠羽はムチ、新羅はアメの使いようを分けた―

その時、

頓狂な声が、歌舞伎町に
響いた―

「御用改めである！真選組だ！」

武装警察真選組とはまさしく彼等のことを言う
…別の名幕府の犬は
今現場へと到着した。

「あっ！来たです！ニコチン中毒ー！！」ブンブンと手を振る―
満面な笑顔で―

「？誰がニコチン中毒だ！！……
ていうかお前等なんだそれ…」

「何って？」頭にクエスチョンマークを浮かばせる。

「お前の後ろの煙が出てる物体。んで連沢の踏み付けてるそのやつ。
」

「何って…」

「このコンビニを襲った」

「強盗犯どもだけど？」

声を揃えて

「何か？」と言う。

「おっお前達、まさか二人だけでこいつらをとっ捕まえたのか！」

真選組局長ゴリ…近藤勲が焦りながら問う。

「そうだけど…。何か問題でも？」

「凄いじゃないか！お前等！問題以上に、お前等の手でこの強盗犯を捕まえるとは…！やはりお前達を隊長、副隊長に任命して良かった！

俺の目に狂いはなかった…「あったよ！！アンタよく目擦ってよくみてみろ！！なんでこいつ地面に頭

減り込んでるの！なんで

身体から煙出てんの？なんでコンビニ全壊してんの！」

一つ一つ指を差しながら、堪忍袋がキレるほど

どでかい声をあげる。

「だってこいつらムカついたんですもん！なんか女女女女…うっざ

しかったし」

「それはただてめぇ自身のムシャクシャを晴らしたかっただけだろっ？

じゃあこのコンビニは？」

「それも翠羽がやったことです！こいつら新羅に発砲したんですよ！それがムカつかないでいられますか！だからバズーカ使って外に吹っ飛ばしてやったです！」腕を組み、鼻をフンッと鳴らす。

「お前のそういう神経を吹っ飛ばしたらどうだっ！！

てかどこからバズーカ取り出した！！」

「いや取り出したっていいか…元々あった…的な？」

「はっ？」

「すいません。土方さん…俺この事件が起きる前にこのコンビニにバズーカ

置いてきちゃいやした…」真選組一番隊隊長沖田総悟は土方をキレさせようと挑発した。

「おんめぇは！！！」
ピキッと血管がキレる直前に新羅は
「まぁまぁ…バズーカがあったからこそ人質の命が救われた…って
思考パターンをプラスに変えても良いのでは？」
と言われ、
なんとか修羅場にならずに済んだ。

総悟が小さくチッと舌打ちをしたことは誰も知らない―

「おいっ！奥平っ！てめぇは後でしょっぴいてやる！
にしてもコンビニはこの有様……！！
ってことはまさかお前人質…」
「まさかっ！
私もそこまで馬鹿じゃないです！こいつらやコンビニはともかく
人質の命は全員無事ですぅ！」

任務は遂行した！とでも言いたいのかグッジョブサインで現した。
警察ともあろうお方が人質の命を取る失態など起こしたら幕府の犬
の恥の上塗りどころか今この場所で
彼女等の腹を斬らなくては示しがつかない―

そんな手間が省けた土方は「そうか…」と一言だけ告げ
コツ…コツと靴を鳴らしながら歩いていき、
全壊したコンビニ（一応）？のなかに入る前に、煙草を地面に落とし潰した後
人質のもとに歩み寄る―

「すみません…皆さん。怖い思いをさせてしまい本当にすみ……」

ちらっと人質が集う場所とは異なる場所に視線を向ける。

正確に言えば、人質達の集う場所のちょいと左側に視線を向ける―。

「万事屋…？」

「んあっ…？ニコチン中毒…！」

ピキッ―

「ニコチン中毒じゃねぇぇ！」
今度は完全に血管が切れた―
ダッダッダッダッ―

ガシッ―
銀時に近寄り、胸倉を掴み無理矢理立たせる―
「おい！てめぇ、こちとら今無性に虫の居所が悪ぃんだよ。あんまりストレス抱えさせんな？」
眉をピクピクさせながら銀時に言う。胸倉を掴む手をバッと離し、逆に銀時が土方の胸倉を掴む―

「アァっ？お前誰に物言ってんの。こっちはジャンプ買いにコンビニ寄っただけなんだよ。
なのに何これ。
なんでこんな事件に主人公が巻き込まれてんの！！なんで危機的状況にあってんの！」

胸倉を掴む手をバッと離し、また土方は銀時の胸倉を掴み今度は壁にダンッ！と激しい音と共にぶつける！

「んなてめぇのおつかい話なんざ知らねぇーよ？
いいからとっとと失せろっ！！目障りなんだよっ！」同じく、銀時も土方の胸倉を掴み反対側の壁にぶつける―

「アンタさぁ、こっちは
被害者なんだよ！れっきとした“人質”なんだよっ？もう少し扱い良くしたらどうだ」

ガシッ―

「てめぇの何処が
人質なんだよ。おめぇがおだぶつしてくれるんだったらちっとは扱い方を変えてやっても良いぜ」

「アァッ？」
「アァッ！！？」

コンビニの中でガミガミと激しく口論する二人の声ははっきりと外に漏れていた―

「にしてもてめぇらんとこのやつどういう教育させてんだよ！」

「やつ…？」

「ちょっと！！アンタたちの声外にタダ漏れしてるんだけどー！もう少しボリューム落とせばー？」コンビニの中に耳を塞ぎながらやってきた

新羅　そして翠羽

「そう！！やつって
この女共の事言ってんの！」

銀時は、彼女等をビシッと指差しながら言う。

「多串君っ！！君この娘達にどんな教育させてんの！なんでこんな女共がてめぇらみてぇ糞集団の隊長、副隊長に勤めてんの！！
つーか武装警察に女が入ってる時点で可笑しいだろう！！」

ゼーゼーと激しく
息をならす。
「それに…」

「あっ？あのさ…。」

新羅はちょっと困り顔で話し掛ける―

「此処で話すのもなんだから外(そっち)で話さない？」

皆頷き…そうですわね、
そうだなと言い
外へと歩き出す―

新羅は、歩きだす前に
人質の皆に顔を向け

「皆さんも外に出てください。この建物いつ崩れるかわかりませんし、中には怪我をしている人もいるやもしれないですから。

今四番隊が皆さんを手配してくれます。今日は本当に申し訳ありません。」

礼儀正しくお辞儀をし、
「後でまた改めて謝罪させて下さい」と言って
歩きだす

外では、四番隊の隊士が
万全な態勢を整え、指示が出るのを待っていた。

隊士達の横を通り過ぎる最

「後はよろしく…」
と指示を出した

「はっ…ハイッ！！」隊士達は、自分のポジションへと着く―自身の仕事を成し遂げる為に―

外に出るとさっきまで銃を向けていた男達は、真選組に取り押さえられ、パトカーに入れられていたり

マスコミに取材を受けてテンパっている真選組等などと…。
外はガヤガヤと騒然な不陰気になっていた―

「お～い！こっちこっち！」

翠羽は初対面にも関わらず馴れ馴れしく呼ぶ―

「ハァー」っと頭をボリボリかきながら二人の元へ行く

「…あれっ？多串君は…？」
さっきまで口論していた多串…土方は何処にもいなかった。

「たぐ…？

あぁーニコチン中毒ですかー！ニコチン中毒ならマスコミに捕まってますよ！」ホラッと笑顔でその方向に視線を向ける。そこには報道陣の真ん中に立って取材を受けている土方がいた。

「まっあんなやついないほうが話は進むです！気にしないー気にしない！」

手を横に振り、気にしない…と振る。

「おっ万事屋…！！お前なんでこんなところに…？」

近藤が、コンビニの中から出て来て、こちらに気づいたらしく近寄る。

「やあエネゴリくん！！」

「あっ近藤さん！！近藤さんもこの方とお知り合いなのですか？」

新羅は近藤に問う。

「まぁな、知り合いというか腐れ縁ってやつか？」ハハハっ！…と

両手を頭の後ろに回しながら照れ臭そうに笑う―今此処に土方が居合わせていたらまた修羅場と化していただろう…。
多分…！

一方銀時は
ケッ！と耳をほじくりながら明白（あからさま）に言う

「へぇーそうなんですか！」新羅は優しい笑顔で微笑む

「あっ…！お前等も自己紹介したらどうだ…？お前達も晴れて隊長・副隊長に任命されたんだ。名前くらい覚えてもらう義務くらいはあるだろう…？なっ万事屋！！」

肩を、パンパンと叩き、無邪気な笑顔で「なっ！」と言う―。
「あっ…ああ…」

（もう知ってんですけど！強盗犯に教えてた時、俺もうしっちゃったし！
てかもう小説の内容のなかにモロ名前ポロリしてんじゃん）「んじゃあ…私から

私は真選組四番隊隊長

連沢新羅…」

「同じく真選組四番隊副隊長　　奥平翠羽　　です」

「よろしく…です。」

万事屋と手を交わす―

「よろしくね…万事屋さん」「えっ―」

銀時は、唖然とする―

「そんなびっくりした顔

しないでよ！土方や近藤さん達が貴方の事そう呼んでたから呼んでみただけ…！なんか悪かったかしら？」

「あっ…いやそういうことじゃなくて…。」（今の……。）

「フフフっ…頼もしい人！反応が鈍い人って私好きよ！」

「はっ…？」

「嘘嘘ー！

からかってみたかっただけ☆…というより私貴方の名前も知りたいんだけど…。紹介して貰いたいなって…。」

「あっ…俺は坂田銀時。
“万事屋銀ちゃん”って所で働いている。」
「あ～だから皆万事屋って呼んでいるのね！んじゃあ…えぇって…
銀時って呼んでも良いかしら？」

「あぁ呼び方は別に何でも…」

「そう…じゃあ改めてよろしくね！銀時…」

「こっちこそよろしくな…」
二人は手を交わす―

？

……何かがおかしい…

……何かが…
…！

（…こいつ！！まさか…。）
銀時は何かを察知したらしく新羅の顔をジッと見つめる。

ハッ！！と新羅はそれに気づいたらしくバッ！と交わした手を無理矢理離す。

「そっ…
それにしても今日は雲一つない晴天な空よね！」
新羅は何もなかったかのように空を見上げた―。

「あぁそうだな…。」

（間違いねぇ…こいつ！！）

―チャン　―サン
――んさぁん　、ちゃん
銀さぁぁぁん―！
銀ちゃゃゃん―！
「！！」
声のする方に目を配った　そこには―

インスピレーションが素早く働く人ってなんか素晴らしい（後書き）

眼鏡をかけた少年　と

チャイナドレスを着た少女　が

とてつもない速さで

こちらに迫ってきた

どんな人間も皆皆生きているんだ！友達なんだ！（前書き）

早めに更新しました！

どんな人間も皆皆生きているんだ！友達なんだ！

ものすごい速さで銀時等の前に姿を現した者―。

それは―

「新八っ！神楽っ！お前等なんで此処に…！」

「ゼー…なんでって…ハー銀さん帰って…
来ないなって思ったら…ゼェー…テレビに…映ったのが……このコンビニで…それも強盗事件だっていうから…

「だから…ゼェ…私達……心配で心配で…家から飛び出して来たアル…！
」

「おまぇら…」

「ゲホッゲホッ…」

咳ばらいする神楽の背中を優しく撫で、片方の手を新八の頭にポンッと乗せる―。

そして

「あんがとな…。」

銀時は二人にもう大丈夫だ…と微笑みながら告げる

神楽と新八は

ニヒヒ！！と無邪気に笑う

「銀時…。この子達は？」

新羅は、その場の空気を壊すかのように問う―

「あーこいつらは俺の…」

「家族ですっ！！」

新八は、銀時の大きな
手を頭に乗せたまま振り返り、新羅に告げる。

「そうアル！！銀ちゃんもこんな地味で冴えない新八も私は大好き
アルっ！！」

神楽も、頬を赤く染めながら照れ臭そうに言う。

「まぁっ血は繋がってねぇけどよ！」

その三人は太陽の光のようにとても眩しく見えた―。

その笑顔が眩しくて―。

まるで

本当の“家族”のように

「そう…」

そんな三人を眩しく見ていた新羅は

また優しい笑顔で微笑んだ―

「って…？なんかすみません！初対面の方にこんな変なこと言うのもあれなんですけど…
なんだか僕達、“家族”
というものがどれだけ大切な事かってことを改めて分かった気がするんです！」

「改めて…？」

「えっ！
いや元々家族というものは大切なものだというのは
わかっていた事なんですけど…なんだか…ねっ神楽ちゃん！」

「わっ私に振るなアル！！…んと……

とっ！とにかく！！
わっ私は銀ちゃん達が大好きアル！！／／／／」
顔を梅干しのように、赤く染める神楽―。

「プッ！神楽ちゃんそれ理由になってないよ！」

「うぅっ五月蝿いアルっ！駄眼鏡！！」

「駄眼鏡って呼ばないで下さいっ！！！」

「眼鏡ザルっ！」

「名前変えりゃ良いってもんじゃねぇんだよ！」

「クスッ…

てことは、つまりこの事件があったからこそ
貴方達の家族の絆がより一層深まった…！

って言いたいのかしら？」

新八と神楽は醜い争いをすぐにやめ

「えっいっいや…！！
そういう事じゃなくて？そのえぇっと…」

「良いのよ良いのよ！子供は単純で扱いやすい♪」

どっかの感情の鈍い人とは違ってね…」クスッと笑い、視線を銀時にちらっと向ける。

「はいはいっ！どうもすみませんね…。謝りますよ謝れば良いんだろ…。謝れば！」

銀時は鼻をほじくりながらハイハイっと言い、指についた鼻糞をプンっと飛ばす

「別に銀時って決め付けてるわけじゃないわよ♪」

「その“♪”やめてくんない？腹立つんだけどー！」

「そういえば…貴方達の名前まだ聞いてなかったわね！！よろしければ教えてくれない？」

「聞けぇぇぇぇ？？？」

銀時の話をスルーした新羅は、キレられながらもまたもやスルーし、新八達に、「お願い…！」と両手を合わせ頼む―。

「あっ勿論っ！！僕の名前は志村新八…って言いますよろしくお願いします！
」

「こちらこそよろしく♪」

だが新羅は、「よろしく」と心を交じらわせるも…
何故か手を
交わせようとはしない

それを、疑問に思う銀時―

「はーい（＾ｏ＾）／
次は私アル☆
私の名前は　神楽って言うアル
この歌舞伎町（町）の
女王ネ♪
よろしくアル♪」

「えぇよろしく♪」

やはり
神楽にも　手を交わらせようとしなかった。

何故―？やはりあの時のは…！

「んじゃあ次は私…

私は真選組四番隊隊長

連沢新羅

よろし…」

「お前真選組だったアルか！あのニコ中、ゴリ、サドがいる税金泥棒がいるあそこの四番隊隊長だったアルか！！」

「えぇ…でも隊長に就任したのはつい三日前だけど…」

「三日前ーーー！！！」

ガシッ―

神楽は新羅の両肩をしっかり掴む。だが身長が足りないせいか神楽は爪先立ちをし背伸びをすることで新羅の身長にちょうどたどり着くことが出来た―。

「新羅！今からでも遅くないアル！今すぐ“万事屋銀ちゃん”に転任するアル！！」

「えっえぇ？」

「お前あんな男真っ盛りな集団の中に居て、息苦しいって思ったこと一つ二つ思ったことあるだろっ！！」

「えっ…と、まあ…確かに二回くらいあったか…ウグッ…！」

両肩に力をさらに加えられ棒直状態に陥った…
「だったら今すぐエネゴリ共に退職届け出しにいって退職金掻っ攫って持ってくるヨロシ！！！」

「神楽ちゃん…それただお金が欲しいだけじゃ……」

「神楽…ごめんなさい…」

いつのまにか神楽の手は、新羅の肩から離れていた―

「あれ？」

神楽自身も自分の手がいつ新羅の肩から離れていたか知らずに　ただ新羅の顔を低い位置から顔を見上げることしか出来なかった―。

ポンッと神楽の頭に手を乗せ
そしてとても
あの時の笑顔が嘘のように―とても悲哀な顔で
話し始める。

「私達が、この歌舞伎町の　庶民の命を守るが為、真選組に入ったのは　言うまでもないけれど

それ依然に　この真選組に入った理由も有るのよ…。」

「理由…？何アルかそれ？」」

「それはまた後で教えてあげる。いずれ言うときは来るから…。」

薄く微笑んでから、

頭をポンポンッと軽く叩くと後ろに数歩さがり

神楽から離れる―

「翠羽も自己紹介しなさ…あれっ…？

翠羽……？翠羽！！」

辺りをぐるぐると見回しながら声をあげる―

「此処です。此処！」声のする方に目を向けると翠羽は
いつのまにかパトカーの
助手席の窓から顔を出していた―

「なんか今さっき此処らでひったくり事件が起きたみたいなんです
ぅ！

だからちょっと私達行ってくるですぅ！」

「出してっ！！！」

ブォォォォン！―

乱暴にエンジンを掛ける音が鳴り響き
もの凄い速さでスピードを出しながらUターンをし、気がつけば翠羽の乗るパトカーはありんこほどに小さくなって見えた―

「あちゃー？翠羽にも自己紹介させようとしたんだけどね…」少し苦笑いをしながら、「じゃあ…あのこの代わりに私が紹介するわね

あの娘は私と同じ
真選組四番隊副隊長
奥平翠羽

ちょっと口汚い部分もあるけど仲良くしてあげて…。

それにあの娘…

戦争孤児だから…。」

顔を俯きながら、翠羽の過去を話す―

「戦争で親を亡くしてからそれ以来、私以外の

人にあまり接しなくなってね…。でも
あの娘多分貴方達となら打ち解けあえるかもしれない
さっき銀時とも初対面にも関わらず、普通に対話していたしね！だから…」

「分かったネ♪
私こうみえてとてもフレンドリーアル♪すぐに翠羽とも仲良くなってみせるアル！！ねっ新八！」

「うん！僕達も翠羽さんと心通わせたいです！」

「そう！それはとても有り難いわ！あっでも一つ約束して…」

スッ…と
人差し指を唇の前に立て

「翠羽が戦争孤児だった事は貴方達以外誰にも口にして無いから、
翠羽にはともかく誰にも口を滑らさないように…！」

「分かりました！！」

「新羅隊長ー！！今
翠羽副隊長から連絡が来ました！　ひったくり事件を起こした犯人を捕まえたらしいのですが、どうやら何か面倒事が起こってるらしいです。

事が大きくなる前に…と告げたあと連絡が途絶えました。
緊急要請です。いかがなさいましょう。」

一人の隊士が新羅に
遠くの方から、ひったくり事件の事々を報告する。

「分かった！今すぐそっちに向かうわ！」

隊士に告げると、フゥーとため息をつき、銀時らの顔を見る―

「残念だけど、そろそろ私も行かなくちゃいけないわ！私も隊長としての指命も受けもっているんでね…。

近いうち、ゆっくりとまたお話しましょう…！今度は立ち話ではなく、ファミレスとかでね…その時は翠羽も連れていくから、改めて自己紹介させるわね…」

「ハイッ！くれぐれも
気をつけて！」神楽と新八に笑顔で
手を振り、銀時の横を通り過ぎる最―

神楽や新八に聞こえない程度の声で―

「良い仲間を持ったわね…

幸せそうで何より…
でも

気をつけた方が良いわよ…

貴方を狙う…いや殺うとしている人間がまだこの街に居るかもしれないから…」

耳元で囁くその透き通るような美しい声は、

銀時に
『恐怖感』…というものを抱かせる―

「っ！！てめぇ…！一体
「！！！」

新羅をキッ！と鋭い眼差しで新羅を睨む―

だが新羅は
怯える様子もなくただ―

異常と言って良いほどに、笑っていた―

だが至って普通の
笑顔ではない―

いびつに
微笑むかのように―

風が吹くと、新羅の髪は
一本一本が靡く―
靡いた髪は
その怪しく笑う顔に
覆いかぶさるかのように

風が弱くなるにつれ、髪は顔からゆっくり一本一本
離れていき、また元の
位置へと戻る―

その至って正常ではなかった顔は髪が元の位置に戻ったタイミング
と同様に、
顔もごく普通の女の顔に戻っていた―。

あの時の顔がまるで
嘘だったかのように―

あの顔は　幻だったのか―？
それとも―？

ニコッと笑いながら
「さようなら♪」
そう言い、銀時等に別れを告げた―。

新羅は小走りに走りながら　隊士達の元へ急ぐ―

その途中、

ニヤリ…といびつな微笑みを浮かべながら、
独り言のように―

「やっと…

やっと会えましたね…。

この時をどれだけ愉しみにしていたか……

貴方には想像も

つかないでしょうけどね…。」

小走りに走る足をゆっくりと止め、

銀河の果てまで続く

遠い空へ向かって

歪んだ笑顔を向けながら呟いた―。

「白夜叉……。」と。

止めた足をまた小走りに走らせながら

女は自分の任務を遂行させるために

隊長としての任命を果たすために

―自分の持ち場へと駆ける

気付いた時には、

そこには奇妙に笑う女　　は既に居なく

江戸を…歌舞伎町を護らんとする　勇敢な女が

一人そこにはいた―

どんな人間も皆皆生きているんだ！友達なんだ！（後書き）

新羅はどうして銀時が白夜叉だってことを知ってたんでしょうね？

それも後ほど分かります！

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんっ！！だからといって複数なら良いとは言わない！！

銀）なぁ…。俺思うんだけどさ…。

新）なんですか？

銀）この小説次話投稿すんの遅くね？

新）……まっ…まぁ…

人には色んな事情というものがありますからね！

仕方ないんじゃないですか？」

銀）その割にはアクセス数は良いってこれどういうこと！

神）いつも怠けてる作者のくせに、アクセス数は上昇って何かムカつくアル！

新）良いことじゃないですか！どんなに作者怠けてたって裏では皆に見てもらえるよう頑張ってるんですよ！

銀）怠け＞アクセス数……。これって新八＞メガネいけんじゃねぇか？

神）それ良いアル！さすが銀ちゃんアル！！

新）てめぇら…！

殺すぅぅぅぅぅ！

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんっ！！だからといって複数なら良いとは言ってない

―その日の真夜中

針は二回目の１２時を回り

新たな日を
満月と共に迎えた―

かぐや姫でも降りて来そうな、どでかい満月の下を

二人の女は――

コツ…コツ…とピンヒールの音を鳴らしながら
暗闇を美しく奏でる―

「ハァーっ…全くぅ…何で翠羽達が見回りなんてやらんにゃいけな

いんですか？」

遡ること1時間前―

今日はどうも珍しく歌舞伎町内で事件が多く多発し、翠羽達はいつもの3時間は残業していた
無理に言えば、無理矢理
駆り出された！
と言っても過言ではない―。

屯所で食事を済ませた後、各自の部屋に戻り（新羅と翠羽は同部屋―）
今日あった事件の資料を見ていた

……勿論新羅だけ…。

翠羽は…、
頬に手を当て、肘を机につけながら資料を開いてるも疲れが身体を蝕み
カクンっ―！と
首をうならせる―。

トントンっ…

「誰？」

「俺だっ！土方だ…」

ガラッ―

真選組副長マヨ…土方十四郎はつれない顔で障子を開けた―

「こんな時間にどうしたの？」

「レディーの部屋に何のようです！！」

「単刀直入に言う…！
てめぇら今から
見回り行って来い！」

「はっ？」

彼女達は、阿吽の呼吸かのように息ピッタリに首を右に傾げる―。

「ちょっ？
ちょっと待つです！今日の見回りは沖田のはずです！なんで私達が…」

土方は「あ〝ぁっ！」と唸り頭を抱える―。

「アイツまたサボりやがった…？隊士達は全員別の事件（ヤマ）の調査で今さっき屯所を出ていった。
総悟はどっかしらで油売ってるはずだ。俺は総悟を探しに屯所を外す。

近藤さんには、何かあった時の為に屯所（ここ）に残ってもらう！　んで代わりにおめぇらは歌舞伎町を見回り警護しにいけっ！」

「だからって！
こっちは今日の事件等で身体がもう悲鳴あげてるんです！私達女一同は
もうまんじりと寝ないといけない時間…」

―バリッ！！
土方は指で障子を鈍い音と共に切り裂く―

「いつ何処で何時何分何秒地球が何回廻った日に俺がてめぇらを女と認めたんだ？あ〝ぁ！

さっさとその眠たげな顔叩き起こして、歌舞伎町内とっとと見回り行けっ！」
翠羽はその声で、
パッと目を覚まし
足の爪先から鳥肌がたつのを感じた。
翠羽と新羅は彼が

―鬼の副長―

と呼ばれる意味を改めて知ることとなる―。

―そして“今現在”と繋がる―。

翠羽は両手を頭の後ろで組み、
「ふぁーぁ…」と悪評をする

「夜更かしは美容の大敵だってのに…！あのニコ中何も分かってないです！
つーかあのサド！！
帰ったらニコ中殺る前に
真っ先に殺してやるです！」

「翠羽…総悟は殺しても良いけど、土方は駄目よ！
総悟探しにいってくれてるんだから！アンタが探す手間が省けたってことなのよ！礼の一つでも言ったら？」

（そ…そんな笑みで殺す…とか普通に言うアンタが1番駄目だと思うけど…。）

翠羽は苦笑いをしながら
「あ…あぁそう…ですね」とつい敬語で返答する―

「に…にしても、今日は随分と綺麗な満月ですぅ！」

話を反らそうとするが、確かに今日は妙に

月に一度見るごく普通の
満月より、今日の満月は以上なほど赤い
紅色をしていた。
その満月から放たれている月光が彼女等を美しく飾る―。

「そういえば…。新羅貴方って…」
「伏せてっ！！」
「えっ…ちょっ！……」

素早く翠羽の身体を地面に俯せにさせる―。
新羅も翠羽の隣で俯せ状態になる―。
……
五秒ほどたっただろうか？新羅は顔をあげる。
すると　前には
何本かのクナイが荒々しく地面に突き刺さっていた―。

「なーんだ…。
月に見取れて

勘付かないかと思った。」後方のすぐ傍から女の声が闇の中から聞こえてきた。

スッと立ち上がり隊長服に付いた砂をパンパンっと叩き落とし
スカーフをキュッと締める―。

「相変わらず色気のない
登場ね…。」

クルっと髪を風に靡かせながら振り返り、電柱の頭にのっている青い髪のショートヘアの女を顎を少しあげながら見上げる―。

「久しぶりね……。

蒼琉……。」

真夜中、一人で歩いてちゃいけませんっ！！だからといって複数なら良いとは言わない

これでオリキャラ全員集合しましたね☆

○時だよっ！全員集合ー！

髪の毛って何本あるんだろう…。（前書き）

いやーめっちゃ更新してなかった？おかげで、アクセス数がヤバスヤバスっ！！

ではではどうぞ～

髪の毛って何本あるんだろう…。

「蒼琉っ！！」

「やぁ翠羽っ！久しぶりの再会だね…」

そう言った後、蝶が舞い降りるかのように電柱から地面に降りる―。

「蒼琉ーー！！！」
まるで
はしゃぐ小さな子供かの
ように『蒼琉』という少女の元へ腕を横に真っ直ぐ
伸ばしながら駆け出す―。そしてバッ！と蒼琉に抱き着く―。

「蒼琉！会いたかったです！まさか此処に来てから４日も会えなかったとは思わなかったですぅ。」

翠羽は、蒼琉の小さな身体をググッ！と締め付けるように厚く抱く。
今にも骨が折れそうなくらいに…。

「そんなおおげさ過ぎだよ。たかが４日だろっ？」蒼琉は締め付けられる自分の身体に我慢っ！と言い聞かせハハハ…と笑いながら堪える―。

「でも…この四日何処に行ってたですか？」

「ちょっと用事があってね君にも一応関係のある話だよ！」

「なっなんですか！！翠羽に関係のある話って！？」

「ハハッそのうち分かるよ…。」

「だけど…。」

目つきがコロッと変わり

「君にはとても関係深い話だけどね…新羅」

翠羽に向けていた笑顔とは裏腹に新羅には

感情の一つのカケラも無い顔をスッと新羅へ向ける。

「せっかくの久々の再会だってのに何その別人のような顔！」クスッと肩を竦め

蒼琉にニコッと微笑み　投げ掛ける―。

「そうですよ蒼琉！せっかくの再会なのですから新羅に……」

そう言い終わる前に、翠羽の瞳から蒼琉の姿が一瞬にして消え去った―。

「えっ……ちょ蒼…」

辺りを見回すと、蒼琉は翠羽から離れ、変わりに新羅の前方にいた。

だが
蒼琉はただ新羅の前方に立っているのではなく新羅の胸倉（隊長服のスカーフ）をグッ！と蒼琉自身の身体の近くに無理矢理寄せる―。

「まさかとはと思うけど
これただいまの挨拶？」

新羅は胸倉を捕まれながらも今だ微笑む。

「そういうことにしておこうか新羅…。

話を戻すけど…。
君は此処最近にて真選組に入った。それも隊長にまで就任……。
別にそれは君個人が決めたことだから、口を出すつもりはないけど……」

蒼琉は、胸倉を掴む手にさらに力を加える―。

「僕達は
歌舞伎町
（このまち）に遊びに来たわけじゃない

それくらい、覚えてるよね

「ていうか
蒼琉…首が痛い…離して」

胸倉を掴む蒼琉の手首を掴み、離そうと手を左右に揺らす―。

「新羅…。僕達は……」

「蒼琉…手」

「あの方を…！！」

「手っ！」

「あの方をさ…」

ガシッ！！

「だから、離せっつってんだろうが…」

まるで別人にでもなったかのように新羅の目つきがギロッと鋭くなり、胸倉を掴む手を無理矢理剥がす―

「言われなくてもアンタの言いたいことは嫌というほど分かる…。だけど、私達は歌舞伎町
（このまち）にまだ来たばかりじゃない？…。ましてやまだ一ヶ月もたっていない。

だから……」

「ヴッ！！！」

蒼琉の腕を掴む
新羅の爪が蒼琉の腕に深く食い込む―

「もう少し様子見をしたほうが良いと思うんけど…

「どう思う…？」ニコッと微笑みを浮かべる―。紅い月光が当たってるせいか、新羅の微笑む顔がいつになく怖い―。

バッ！

新羅の腕から逃げ、新羅の傍から7歩ほど後ろに下がる―。掴まれていた自分の腕を見ると、傷一つ無い

白い腕を

赤黒い液体が

ツ―ッと一本の長い線を作り、やがて地面に滴る―

「言われなくても……

計画は実行する…

コツッコツッ—と川辺の近くへ行き、水面に写る月を数秒上目遣いをしてから
上空を見上げ、本物の月に目を向ける—。そして
バッ！と片手を奇妙な紅色に染まる満月にニコリ…と笑いながら手を翳す—

「もう少し……

もう少しで…

計画が実行される…

だから…」

「新羅貴方まさか…」

「翠羽…これは僕達への指命だ……。何がなんでもあの方に……。」

その時、奇妙に照る

紅く染まる月から放たれる紅い月光を浴びる

その

三人の女は

まるで――

「それと、蒼琉……」

「何？」

「もしかしたら、私の正体ある男に知られたかもしれない…そしたら…」

「分かってるよ……

その時は……

殺せばいいから……」

返り血を浴びた鬼のようだった―。

髪の毛って何本あるんだろう…。（後書き）

なんか内容が変なんなってきた。ヤバス…

だるい時に勉強はかなりキツイ（前書き）

銀魂新巻買いましたー♪
まじ面白い○ω○♪

だるい時に勉強はかなりキツイ

翌朝…

ここ数日は雲一つの無い
晴れ晴れとした天気が続く。
その青い空は、彼方まで続き目を細めて見て見ても雲という物体は
何一つ
見当たらない

秋風は　遠い山々から
　落ち葉を舞かせ

次の町―…次の町と過ぎ
　歌舞伎町へと運ぶ―

その葉々の数枚はまた
風に煽られ、

「万事屋銀ちゃん」

と書かれた看板を通り過ぎると

また

新たな
　遠い旅へと再出発をする

「暇……」

「暇アル……」

今日は、
晴れ晴れとした天気＝
仕事の依頼殺到！！！

なんて夢のまた夢の話…。
現在午後2時ちょいを回った。今日は仕事の依頼が待ったくと言っていい程来ない…。

外へ出て、ファミレスにでも寄り食事をしよう！……

なんて

そんな余裕な金はないっ！！！
この頃
仕事の依頼は一日に多くて
二回っ！！！！

飯代など
家賃代へと姿形を変え何処かへと旅立つ―。

他にも
定春の飯代・トイレの砂等でパーになりペット？の生活用品のほうが人間様よりも図りしれない。

そもそも銀時等に
“ファミレス”などという

高台へと駆け上がることはまず無い―。

「にしても暇だ……。
まるで三ヶ月前のジャンプをみて
「この展開何回もみた…。確かヒロイン死ぬんだよね…。ホント泣いたわー。」
みたいな飽き飽きしながらもジャンプを捲る
心が満たされるようで
満たされないあの感情と何か似ている…」

銀時は、ソファーに横たわりながらジャンプのコマを一つ一つ目を落とし、ピラッと一枚捲る―。

「というか腹減ったね！
新八ー！！ピザ持ってくるヨロシっ！！」

「そんな金あるわけないでしょー！ただでさえ今月分の給料貰えるかどうか分からないんだし…。」

新八は割烹着とマスクを着用し、右手にははたきを持ち棚をパンパンっと叩きながら

「銀さーん！！今月分の給料大丈夫なんでしょうねー？」と飽きれ声で言う。

「あー大丈夫大丈夫心配するな……
今月分のてめぇらの給料から差し引いて俺のパフェ代に加算されるからっ！」

バッ―！！！！

「何が大丈夫大丈夫だよっ！何差し引くって！！なんで僕達の給料がてめぇのおやつに加算される訳っ！！」

新八は無理矢理ジャンプを取り上げて、銀時の顔の近くで怒鳴る―！

「ったく！耳元でうるせぇーな！！仕方ねぇーだろ仕事の依頼が来ねぇーんだから…。俺は糖分食わねぇとこの先どうなっちまうか分かんねぇんだから俺の糖分の為にも給料分けてくれよ

なっ！」

「なっ！じゃねぇーよ」糖分控えろっ！！！そしてその金給料代としてこっちに渡せっ！！天パ馬鹿！！」

「何その天パ馬鹿って！！お前そんな変なあだ名なんて付けっからろくにフィギュアとかキーホルダー出ねぇんだよ！羨ましいだろっ駄メガネちゃん！」

「駄メガネじゃねーよ！！つーか今関係ねぇーよ！！この元タマ無し！！」

「あ〝ん！！なんだ
やんのかゴラァッ！！」

「あ〝ぁッ！！
なんですか！！！！！」

「ちっちゃいアル……。」

神楽は小指を鼻の穴に入れほじくりながらボソッ…と吐く―。

―ピンポーン

「居留守でぇーすよ居留守ー。」投げやりに手をシッシッ―と振り、
玄関先まで聞こえる声で口を大きく開く―。

ピーンポン―

「銀さん出たほうが良いんじゃないんですか？」
「馬鹿！策士裂くとはつまりこういうことだ新八。」
一つため息を零して

「こういう時間帯はヅラが来る時間帯とちょうど一致している。どう考えてもあの玄関先に居るのはヅラしか考えられねぇ」

「でも銀さん。桂さんならインターホン押しながら「銀さーん！あーそーぼ！」とか良く言うじゃないですか！それが聞こえないってことは違う人なんじゃ…」

「ヅラも毎回同じポジションで来るとは思えねぇ…。まず裏の裏を読む事こそが侍への第一歩だ。覚えとけ！」「銀さん…」

「てなわけで……新八」
ビシッと指差す―！

「玄関行ってこい！！！」

「ハッ？」

「だから玄関…行ってこいって行ってんだよ！」

「はっおまっ…アンタさっき裏の裏を読めっとか言ったよね！さっきと言ってることまるっきり反比例になってんじゃねぇか！！！」

「んなのちょっと主人公として“侍”的な発言取り入れる為の策に決まってるだろっ！コンビニ篇では作者に邪魔されたからな…」

「知らねぇーよ！！少しは尊敬出来るなと思ったら…」

「新八～！ゴタゴタと
口開く暇あんなら足動かせ足～！だからいつまでたっても人気投票

ミラクル８なんだヨ！！」「てめぇーらさっきから僕のコンプレックスに口叩かねぇーと気が済まんのかぁぁぁ！！！」

「えっミラクル８コンプレックス気味だったの？そうかそうかだったら玄関行ってこい！！！」

「意味分かんねぇーよ！コンプレックスと玄関何もイコール関係ねぇけど！」

―ピーンポン

「ほら新八！！」
「ほら新八！！」

銀時と神楽の声が一致する

「ッ！！ハイハイっ！分かりました。出れば良いんでしょ出れば…」

新八は割烹着とマスクをごもごも言いながら外し、はたきを棚に置

いてから玄関に重い足取りで向かう―

途中
廊下を歩いてる最中に
「なんでいつもいつも僕が…」と口を尖らせブツブツと言いながら、
玄関へと近づく―

「ハイハイどちら様ですか！桂さんだったら僕…」

ガラッ！と引き戸を開ける

「……あっ！」

玄関先のところに立っていた人物に思わず声を上げた。

「どうした？新八ー？新聞ならすぐに断……」

玄関先に立っていた人物

それは

着物はボロボロに破け上は泥が至るところに付いており元の色が何色なのか分からない―。

髪は結ってるのか結っていないのか分からないボサボサした髪―。

ガリガリに痩せて目には隈がいくつも出来

今にも倒れてしまいそうな貧相な顔をした

男が一人

そこには居た―

お金の使い道はよく考えろ

そのガリガリに痩せた男は静かに口を開く―

「あっ…あの……万事屋さんでいらっしゃい……
ますか…」
その男は多分依頼人であろう。そう心の中で確信する。

「えっあっ……はい。あっ……あのーとりあえず中にどうぞ。」
新八はその男を部屋へと招きいれ、ソファーに座らせる…。

新八は奥の棚から少量のお菓子と湯呑みを持ってきて銀時、神楽、男の分のお茶を注ぐ。その
湯呑みを一つ一つ前のテーブルにコトッ―
と置く―。

「んで…。俺達に今日は何のご用で?」「銀さん。まず名前を…」
新八は耳元にコソッと言う

「あぁ…まず名前をお聞きしたいのですが…。」

「たっ…高梨…健三郎です。」

「高梨さんって名前なんですか…。んじゃあ名前も知ったことなんで今日は何のご用で…？」

（お前どんだけ依頼内容聞きてぇーんだよ！！）
新八は拳に力をぐっ！と入れる―

「さい…。」

「？」

「助けてくださいっ！！」
その男は頭をテーブルすれすれまで深く下げる！

「貴方達も
知っておられるでしょう？あの！！「連続庶民殺人事件」…」

「……！！

確かその事件って幕府の元で運営する人・また幕府のお偉いさんなどが狙われるのではなく、善良な一般市民だけが狙われる近頃この街に起きているあの…！」新八はその事件について
「前にテレビで見ました」と口を開く―

「そうです……。
そして……私の愛する家族もその事件に巻き込まれ、皆っ！……皆死んでしまいました…！」
男は涙をボロボロ流しながらそのぐじゃぐじゃになった顔を服の裾で拭く―

「じゃあアンタの依頼は、その家族とやらを殺った犯人に仇討ちしたい！
ってわけか…？」
銀時は湯呑みに入ったお茶を一気に飲み乾す。

「でもそうだとしたらどうして警察とかに頼まないアルか？」
神楽は片眉を少し上にあげる―

その言葉に男はビクッ！と肩を震わす―

「そっ…それが
その庶民を狙う犯人ってのが

真選組の者だと…」

「えっ…！」

三人は目を大きく見開く。

「ちょっ待つアル！いくらニコ中やゴリラがいるあの税金泥棒野郎でもそれは…」

「そうですよ！！あの人達は見かけはアレですが幕府の犬ともあろうお方ですよ！そんなことは…！」

「いや…真選組局長、真選組副長などが関係しているのではなく…

どうもそこの隊長等などが関係しているという噂が…」

浮かぶ名前……一番最初に頭に浮かんだ名前……

（まさかっ…サド！）（沖田さんっ…）
二人は冷汗をかく―

「で……
ですがこれはれっきとした噂です！テレビではまだ犯人の特徴は確定していませんと言っています。」

「じゃあ…警察に言えねぇ理由(ワケ)は、幕府の犬共が殺ったなど口を吐けば、ただ事では済まねぇ…。ましてやアンタが
この街の庶民を狙う何者かに標的にされやすくなるとの理由で俺達に頼んだ……っと」

「お恥ずかしながら…」

「だが……こっちもビジネスだ。やすやすと人の命使ってまでその犯人(たわけ)を探しだせとなると

代償は高けぇーぞ！」

フッ―

「こんなこともあろうかと」パチンっ！―

男は指を鳴らす―

ガラッ―！

押し入れから全身黒タイツをはいた男二人ほど出て来男の後ろに立つ！

「ちょっと待てーー！
人ん家からなんで全身黒タイツはいたやつ出てくんだよ！！此処はドラ〇もんの世界じゃねぇんだよ！！四次元ポケットから何でも出て来るレベルのアニメじゃねぇんだよ！！！！」

新八は、全身黒タイツの男達に指をビシッと指しながら口を大きく開き言葉を吐く。

男は全身黒タイツはいた男達からジュラルミンケースを受け取る。

「まさか…」
三人は唾をゴクッと飲む―
まるで、高級品を前にして落ち着きを抑えるのに精一杯の子供のように―

「ご苦労……
お前達は帰れ…。」頭を深く下げ、すたすた…と歩き玄関の戸口を開け出ていった。

「おいいいいい！！だったら最初押し入れから出て来た意味ねぇじゃねーかよ！庶民一般的に玄関から入って玄関から帰れぇぇぇ！！」
新八は玄関に体を向け口が裂けるほど開け言葉を投げ捨てた―

「銀さん…。どう思います？」

「ではよろしく！！」
「こちらこそっ！！」

二人は手を交じらわせ何らかの契約を結んでいた―。
「ちょっと待てぇぇぇ！！僕がツッコンでる空白の何秒間に何があったーー！！」

その何秒間前―

そのジュラルミンケースを開けた途端、辺り一面が一瞬金色に煌めいた―。

「あ…あの…金で釣るってのはどうかと思ったのですがこれ…

１０００万です…どうでしょう…？」

ガシッ―

「よろしくお願いします！」銀時は、男の手を両手で握る―。

「こちらこそっ！」

―以上解説―

「ではよろしくお願いします！！今日の夜にまたお伺いしますので
では……」

深くお辞儀をし、
万事屋を後にした―。

「ぎっ銀さん……。
だっ大丈夫なんですか…？あんな依頼受けて……。」

銀時等が食べたお菓子の袋　湯呑みを片付けながら
新八は問う―。

「大丈夫だ。それに良く見てみろこれだけの大金だ
！！
こんなチャンス滅多にねぇ…。」
「でっでも…。これだけの金があるんだったら服なんていくつも買
えるはずなのに……。なのにあんなボロボロの服……」

変なお金じゃなきゃ良いんですが……」

―ピーンポン

「あっ！高梨さんじゃないですか…？忘れ物でもしたのかな……？」

「ったく…。はいはーい今出まーす！」

―ガラッ

「なんか忘れ物…」

パチッ

パチッ…

瞬きをする―。

目が合う。

前に立っているのは高梨という男ではなかった。
黒髪ストレートな長髪をした男は腕を組み、鼻を高くして銀時の顔を見るなり

「よぉ……銀時久しぶりだな！」

「ヅラ……。」　かつて
攘夷戦争で共に戦った
銀時の旧友　桂小太郎

それが彼のことを言う。

コンビニの卵って意外に高くないっ！？

バタンッ！！

銀時はすぐに扉を閉じた

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン

扉を開けようと必死に攻める者と扉を必死に開けまいと抵抗する者の壮絶なバトルが玄関で繰り広げられていた。

家中には、インターホンの音が響き渡り

新八と神楽も少しずつ

苛立ちを感じてきた頃

銀時は我慢の玄関に達し

ついに

「うるせぇぇぇ！！！」

ガラッ！と扉を乱暴に開け蹴りを一杯入れる―

「んだよ！！！何回もインターホン鳴らしやがって！てめぇクレーマーか！！！俺に何かクレーム付けることあんのかコノヤロー！」

「お前に……話があってきたんだ…！マブダチ…」

「てめぇーとダチになった覚えはねぇぇぇぇ！！」

再び銀時の蹴りをくらい、「ヴブェ！！」と声を漏らす。

「ちっ…違うっ！！クレームでもエリザベスが居なくなったとかフミ子がふしだらとかではないっ！！！
お前も知ってるだろっ…！

「連続庶民殺人事件」

のことを！」

「あっ……まぁな…！

それと俺にどういう接点があるんだ？」

「こんなところで立ち話もなんだ…。中に入らせてもらうぞ。ヴップッ！」

鼻からドバドバ出て来る血を手で押さえながら
銀時の横を通り過ぎ

中へと入る―。廊下にはポタ……ポタと
紅い点がちらほらと見えた―。

とりあえず新八は湯呑みにお茶を注ぎ、銀時、桂の前に湯呑みをコトッと置く。

「リーダーと新八君。悪いが少し二人だけで話たいのだが…。」

桂は真剣な眼差しで新八等に言う。

「分かりました」

「分かったアル」

そう言うと、二人は万事屋を出て何処かへ歩いていった。

「んで。俺に何の？」

「ズズッ…。んあーー

やはりお茶というのは1番上手いな！！」

微笑みながら

湯呑みを置くー

「では本題に入るとしよう

銀時、さっきも聞いたとおりお前「連続庶民殺人事件」知ってい

るな？」　「あぁさっきも言ったとおりだ。」

「まさかとは思うが、変な依頼など受けもってなかろうな…？」

「変な依頼？」
銀時は片眉を少し上にあげる

「あぁ…。俺の部下から仕入れた確かな情報なのだが

どうやらその事件で殺られてる奴ら全員、
その依頼をしたされた者ばかりらしい…」

「したされた者…？
そいつら密売人かなんかか？」

「いや…密売人ともあろうがただの一般人らしい…

表向き…ではな」

「！」「表向きでは、ただそこらで家などを回り売り物を売り売りしてる奴ららしい。

だがその中の多くは
ある組織に入り、何らかの陰謀を目論んで夜な夜な動き回っているらしい……。

まっ攘夷志士との関係…ましてやこの街への害を加えるような真似はしないらしいがな…

心配するな…。」

そう言い終わると、
近くにあった煎餅をひょいっと掴みバリバリッ！と音をたてながら口に頬張る―

「んで…そいつらの陰謀って一体何なんだ…？」

「……しゃあーな。びゅかから聞いたきょとはここみゃでだ……。」
モグモグと
口に頬張り膨れ上がった顔を一瞬にして元の顔に戻す―。

「だが一つ疑問に思うことがあってな……。」

「？」

「さっきも言ったとおり…

奴らはただの物売り屋…。物を売り、その得た金で家族を養って生きている者達だ。」

「？……

それがどうし…？」

「だったら何故……

死ぬ必要がある…？」

「！！」

「それも物売り屋の奴だけではない。それを買った者までもだ…。
もっと例えるならばスーパーの店員とその客が次々殺されていると
言ったほうが早いか…？」

「物売り屋と名を名乗りながら何か薬を売ってるってのはありえな
いのか」

「あぁ…それは絶対無い。俺の部下が実際そこに潜入したらしいの
だが、薬らしき物は一つもなかったらしい。
ただの調度品などが置いてあったらしい

本当にただの物売り屋らしいのだが…。」

腕を組みウーン…。
難しい顔をする。

「まあ話はこんなところだ。お前もせいぜい気をつけろよ。お前は金の為ならどんな依頼も受け持つような軽い男だ。忠告はした…。とにかく物売り屋が依頼に来た…もしくは物を売りに来たなどがあったら直ぐさま断れ！貴様にまで死なれては困るからな。良いな？」

「あぁ…分かってらぁ…」

そう言うと、銀時は脚の付近に置いてあったジュラルミンケースをヅラ…桂に見つからないよう足でスッと退かした―。

～３０分くらい経った頃

「では、俺はそろそろ帰るとしよう…。
銀時、リーダーと眼鏡君にすまないとお伝え願う…。」

「あぁ…分かった。」

「じゅあな……。」

「……じゃない！！
一つ言いそびれたことがあった！」

階段を下りる寸前桂は何か思い出したらしく再び銀時の前に姿を現す―

「その物売り屋が裏で何かを企てているその組織の名なんだが……

琲瑠袈(べるか)

という組織らしい…」

「琲瑠袈…？組織の名というより人名みたいだな…」

「確かに…。まぁもう一度だけ言う。せいぜい気をつけろ。二度目のじゃあな…」

しばらく桂の後ろ姿を見ていたが、その姿も夕日の照る方向へと消えていった。

「琲璢袈……ねぇ…。」

そう独り言を呟く、銀時も万事屋内へと姿を消す。

誰もいなくなった万事屋内を一人歩く銀時、
それとギシ…ギシ…と軋む音をたてながら廊下を進み桂とツーマンで話してた
部屋へと入る。

その部屋はあの時とは全く違う異様な空気が銀時の回りを漂う。

その空気を壊すかのようにその部屋へずかずかと入りジュラルミンケースへと近付き、ケースを開ける―

「依頼ねぇ……

（変な依頼受けてないだろうな……？

どうやらこの事件で殺されている奴全員その依頼をしたされた奴ばかりらしい…。

気をつけろ……。

お前にまで死なれては困るからな……）

「まさか……な。」

ジュラルミンケースをパタンと閉め

「そろそろあいつらも帰ってくる頃か……？」　仇討ちを願う者

依頼を受けた　変わりに

大金を手にした者

それは

幸運を齎す鴉の声か

はたまた

不幸の音を鳴らす鈴虫の呼び声か―。

コンビニの卵って意外に高くないっ！？（後書き）

銀魂蓮蓬篇めっちゃ面白い≧ω≦！まじフミ子やべぇーｗｗ

牛乳飲んだら背伸びるとか言うけどあれは嘘だからね！

その晩―

神楽・新八は７：００ぐらいに帰宅し　早めの夕ご飯を済ませ

銀時達はいつものたわいのない話をして時間を潰してる間に時刻は１０：００を過ぎた。

―ピーンポン

一つのインターホンの音が万事屋内に響き渡り

銀時等はたわいのない話をすぐに切り上げ、

定春の頭をわしゃわしゃと撫で「留守を頼む…」と言うと定春も銀時等の現状を理解したらしく

「ワンッ！」と一つ鳴く。

定春に留守を任し

三人と依頼人は

万事屋銀ちゃんを後にした。歩いて１０分はたっただろうか？

高梨という男の後ろをついていき目的地へと足を進める―。横目でちらっと見ると回りの家々の部屋の電気はぼちぼちと消え、明かりが付いている部屋はごくわずかほどしかなかった―。

四人は気を使っているのか一言も話さず暗闇の中黙々と歩き続ける―

憂一

口に出した事と言えば

「まだか…」

「あと少しです。」

それ以降、地面をザッザッ…と撫でるように歩く音がテンポ良く暗闇とマッチしていた。

しばらくすると

「あそこが……。」

高梨は路地の真ん中をスッと指差す―

「私の家族全員が……殺された所です……。」

話に寄れば、高梨の家族は父、母、娘6歳、兄、高梨の五人家族らしい…。だがこの事件に巻き込まれ、高梨以外全員殺された……とのこと…。

「そんな……。それも家族全員だなんて……。酷すぎる…。」

「本当アル…。この事件の犯人…。人散々殺して何が楽しいアルっ!!人殺して強くなるとでも思っ……」

神楽はハッ!と頭にある人物の面影を思い浮かべた。

「兄貴……」

そう小さな声で呟く。

「…すみません皆さん……。私が仕事依頼したから
皆さんお寒い中此処まで来てくださったのにどうでもいい話してしまって……。

「いえいえどうでもいい話なんてとんでもありません！！」

「私達が見つけてやるアル！そしたらメッタ斬りにしてやるアル！！！」

「本当……
ありがとうございます！！」

「んで……
その犯人とやらが出て来る目星とか付いてるのか？」

銀時は鼻をグリグリとほじくりながら高梨に聞く。

「あっはいっ…確か此処から半径４？以内で事件が多発していると聞いています。」

「半径４？だぁー？てことは直径８？の中から一人振り絞って探せって言うのか？んなの」志村けんの鼻かんだティッシュを探すようなも……

「キャァァァァァァァ！！！！」

「！！！！」

突然、女の悲鳴が暗闇の中から聞こえた。その声はそう遠くはなくすぐ近くだと四人は思い、一目散にその場所へ駆ける。

「ていうか志村けんの鼻かんだティッシュより軽く見つけたんですけどー！！！！！」

銀時の吠え声に誰も耳を傾けず銀時除く三人は息を少し上げながら真っ暗闇な闇を駆ける―

勿論　銀時もだか―…

一人加えてっ…

四人は死角に差し掛かる時に急ブレーキを

足底にかける―。

「なっ！…これは…。」目に止まった『現実』
という名の現実…。

暗闇の中でも良く見えた

泣き崩れている着物姿の女

そして往路には

血まみれの
上半身だけがその場所には残っていた。
ちらっと視線を女がいる場所とは反対側を見る

的中した―。

そこには血まみれの下半身が斬られた所からドクドクと赤い液体を
垂らしながら倒れていた―

「アッ…アンタ！一体何が……。」

高梨は女に震えた声で問う

「アッ……アア……私は……何もしてない…私はただ…」一歩…一歩こちらに近寄って来る。両手を頭の脇に立てながら……。

「私は……死にたくないっ！！こんなっ……こんなところで死に……」

ズシャァァァァァ―

女の背中から激しく血が噴き出す。

そのまま女は頭の脇に手を立てたまま顔面から地面へドサッ！と倒れ込む―。

女が倒れ込んだ背後に立っていた者は女から噴き出た血を体中に浴びた。

血で染まっていてもそれが何者かは深く考えずともすぐに分かった。

高梨から聞いていたとおりの真選組隊長服を着用していた。
真選組制服は黒というより鮮血な朱に染められた灰色のストレートヘアーの女。あのコンビニ事件の時は、私服なのかそれとも変装であんなＪＫの格好をしていたのか分からないが、
真選組隊長の制服を着ている姿はこれが初めてだ。

女に向けた虚ろな瞳はしばらくするとやがて銀時等へと目を向けた。

「まっ……まさ…か」

驚愕のあまり誰も
声に出さなかったが
とうとう新八が先頭切って口を開いた。

「そん……な

どう……して…

その刀の先からは紅黒い液が雫のように……

ポタリ……ポタリと

同じテンポで堕ちる…。

「新羅さんが……。」

牛乳飲んだら背伸びるとか言うけどあれは嘘だからね！（後書き）

真選組四番隊隊長
　　連沢新羅は

血だらけの刀を
　　銀時達に向け

「コンビニ以来ですね…」

優しく
でも何処か
　　あの時とは違った
　　笑みを見せながら

そう小さく口を開いた―

そしてただの『夜』

という

短い時は終わり

今宵の本当の『夜』の

幕開けとなる―

笑顔には裏と表の両方がある

「新羅さ…ん…

どうしてっ！！

どうして貴方がっ！」

「私がどうかした…？」

新羅は薄い笑みでただただ銀時等に目をやる

「どうかしたって…！！

新羅さんっ！

貴方　　真選組隊長でしょ！！
警察ともあろうお方がなんで……なんで…っ
説明してくださいよ！！
新羅さ……」
一瞬
新八の周りだけに
生温い風が吹く。
新八は、自分の隣にいる人物に恐怖感を覚えゆっくりと瞳を横に流す。
「だぁ～から…
私がどうかしたって聞いてるの…？。

それに……」

耳元に口を近づけ
優しく囁く―

「私……あんまり自分の名前を一度に
何度もしつこく言う男

嫌いよ……」

その瞬間、新八の身に何が起きたかは銀時等にも新八自身も分からない。

ただ新八は、新羅の横で勢いよく倒れた―。

その横で倒れた新八を新羅は笑みを見せながら睨みつけ

「良い夢を……。」と言った

「新八っ！！！」

銀時は新八の元へ駆け付けようと右足を一歩前に出す。

だがそれに気づいた新羅は背中を銀時等に向けていたがすぐに向きを変えた。

「てめぇっ……！！」銀時は鋭い目つきで新羅を睨みつける。

「ごめんなさい…別に新八さんを傷つけようとは思ってなかったんだけど…
つい…

でも安心して…

ただ気絶してるだけ…
直に目が覚めるわよ…」

「そういう問題じゃないアル！！！」

神楽は新羅に向け声のボリュームを上げた。

「新羅…お前何やってるアルか！！お前はこの街…この歌舞伎町を護る為に真選組に入ったんじゃないアルか！？なのになんで罪の無い人間を殺してるアルか！！！」

「罪の無い人間……？」

「そうアル！！」

「ハハッ…

アハハハハハハハハハ…！！！」急に新羅は腹を抑えながら笑い出す。

「なっ何がおかしいアル！」

「はーーぁ……
そっかぁーいくらこの街のなんでも屋でもそこまでの情報は知れ渡ってないんだぁー！」

「情報？」

「知ってる？表向きでは物売り屋とかで商売しているけど、裏ではある組織に入り何らかの陰謀を企てているっていう集団……」

「いや知っててなおその男の話に乗ったか……。」

「はっ？てめぇ何言って…」

「まだ分からないの…？
アンタの隣にいる男

　　琲瑠袈　の組織の一人だって言ってるの…！」

「！！！！！」

「ぎっ…銀ちゃ…ん、琲瑠袈って何アル…か」

銀時の浴衣の裾を掴み問う神楽に対し銀時は「少し黙っていろ…」とだけを告げ隣にただ無言で佇んでいる高梨の方に身体を向ける。

「お前っ…本当に琲瑠袈の…」

「……。」

「てめぇ聞いてんのか！！」

「……。」

それでも
高梨は口を開こうとはしない。ただ前だけを見つづけ銀時の方に目を向けようとしない。

「黙ってねぇーで何か言ったらどう…」

「時間の無駄でしたね……」

「！！！」
新羅へ身体を
向けた！…が既に遅し
新羅は一瞬にして銀時等の前に立ちはだかり
「邪魔です…。」その言葉を聞いた瞬間、彼女からは殺気
を感じとった。その目も人間のようではなく……

まるで
鬼のような—

そう思ってる間に
銀時と神楽は新羅からどんどん遠く離れていき
約２０？ほどの所で地面に
引きずりながら止まった。

腹からは鋭い痛みが身体中を走り、その時新羅に

蹴り飛ばされた

という事に気づいた。
隣で神楽は苦しそうに
腹を抑えながら疼くまっていた。

「おいっ！！神楽しっかりしろっ！神楽っ！」

「ぎっ…銀ち…ゃん
新羅…は新…羅はどうし…て……」

「神楽っ神楽！！」神楽もそこでプツンッ！と
電気が切れたように
意識が途絶えた。

神楽が抑えていた
腹を見ると紅黒い筋が
ツーッと出来ていた。

多分それは新羅に蹴られた時、新羅の履いていたブーツのヒール部
分が神楽の腹に運悪く刺さったのであろう―。

銀時は神楽を抱き、
「少し我慢してろ……」

そう言いまた新羅の方を向く。

「やっと二人だけの空間になったわね…。琲瑠袈の将官さん……。」

新羅を前にして、足をガクガクと震え上げている高梨

そんな事知らないばかりに新羅は高梨を冷たく殺気が発つ目つきをし新羅とは思えない程低い声で

「アンタには色々聞きたい事があるからな…。」

そして手を伸ばす―

―が言葉を聞き

高梨はボロボロの

袖の中から

カチャッ―

拳銃の引き金を引き

バァンッ!!―

発砲した―。

「何こういうの運命って言うのかしら…？」

「！！！」

「コンビニ事件の時もそうよ！何発も撃発砲されるわ今も発砲されるし……。」

ハァーと一つため息を零しやれやれ…と首を左右に動かす。

この時点でお分かりだろう。新羅は銃弾をひょいっと軽く首を横に傾けかわした。彼女には銃弾が効かないのかただたんにまぐれなのかは知らない。「こうも銃弾バンバンバンバンやられるとねぇ…

興が冷めるってモンよ…」　バシンッ！！！

右手を刀のように器用に使い高梨の持っている拳銃に一瞬のことで銃口をスパッ！と切り捨て地へと追いやる。

銃口がなくなった…。それはいわゆる成す術がなくなったとの同然。
高梨はその銃を地面にたたき落としその場を立ち去ろうとした。
だがそんな隙を空けようとはさせない新羅は高梨の足に自分の足を駆けさせ地に誘う。俯せ状態になった高梨の手首を持ち片腕を空中に誘う。

「この空間から逃げ出せると思った…？馬鹿ね…」

高梨から新羅の顔を見ることはまず不可能。なんせ片足を高梨の首につけ、無力体制をとらせられている為。

「じゃあ…変な茶番劇が終わったことだし。そろそろ始めるとしようか。」

「…時間も無いことだから、早めに終わらせるわね。
私が今からいくつか質問をするからアンタはその質問に問われた事だけを答えればいい…ねっ簡単でしょ！

でも…

アンタに与えられた
解答タイムは一問に付き約２０秒。早く答えないと……」

ググッ…。

空中へと誘われた片腕を曲がってはいけない方向に少し動かす。

「アッ！グッヴゥ…！」

高梨は喘ぎ声を出す。そして高梨には今の現状は分からない。だが腕に
もの凄い痛みが走り、血液の循環が早まる。「まぁ自分の腕が壊れたくなかったらグズグズしてる暇はない…。そういう事！！」

クスッと笑い、この状況を愉しんでるかのように、
下に居る人間を人間と思わない目で見る。

「分かった？」

高梨は縦に顔を振る。

腕を元の指定地に戻す。

「！…あっ！…銀時貴方も一応関係のある話だからよーく耳澄ませておいてね…。」

「あっ……あぁ…」

「んじゃあ始めましょう！」

笑顔には裏と表の両方がある（後書き）

「それじゃあ一問目…」

「アンタは……

……

……

したの……？」

風が吹く…。

その風は

その場にいた者に教えた

世界は不条理で
不公平だということを…。

人の質問になんでも返答できると思うなよ！！

「はっ……？」

風の囀りが新羅の質問に対し反抗した為、新羅が今何を口に出したのか分からず　ただ「はっ？」と声を漏らした。

「聞こえなかった…？これは銀時…貴方に聞いてるのよ…。もう一度だけ言うわ……。この男になんて依頼されたの…？」

「依頼…？」

「そう…貴方は確かにこの男に何か依頼されたはずよ。それはなに…？

契約の話？

「巻きますか？」「巻きませんか？」と聞かれた…？それとも人形を買…」

「てめぇ何言って…」

「？…違うの？」

違うも何も新羅　が言った言葉に対し銀時は
思考回路が狂う。
（人形……？巻きますか？巻きませんか？）
「じゃあ何て依頼されたの？」
「連続庶民殺人事件」の犯人に家族が殺された……だからその犯人に仇を打つ…。そんな感じの依頼だ…。んでその事件（やま）の犯人とやらがおめぇだったって訳だ。」
そう説明している時に高梨の肩がぴくっと反応した
「家族が殺された……？
成る程……。」
グッ！と高梨の髪を上へ持ち顔を新羅の方に向かせた。
「アンタも考えたもんだね……。琲瑠袈の存在が表に割れないが為に自分の家族を盾にした…か。」

「？」

「銀時…。こいつは家族なんて殺されてない…。まして殺してなんかいない…。　　それに
　私は琲瑠袈の連中だけしか手を出していない。
多分こいつは自分の仲間が次々殺られている事は口を封じ、代わりにこいつの
家族が殺された。家族の為にもその仇を討ちたいとのことで貴方達を使った。そういうことでしょ？
高梨…さん。」

「ってあっ……！それとさぁ…二問目の質問に入るんだけどさぁ…。琲瑠袈の将官さん等……
　あんたら琲瑠袈が大挙し大規模なテロ活動を行っているって情報があるんだけど…」

「！！！！」

「ねぇ…どうなの…？」

高梨は新羅の目を覗きこんでいるだけで口を開こうとしない。

「あぁ……じゃあいいや。この話は最後の方でもう一度聞こうとしましょうか？

本題といきましょう…。

これは私達自身に関係していることでもあるから……」

（私達自身……？）

「ねぇ教えて…

貴方達はテロ活動と共に

もう一つ何か活動してるわよね…。

それは……何？」

「ヴッ…！！」

「これはタイムリミット制限あるわよ……。早く～答えて～。」

腕を曲がってはいけない方向へと少し動かす。

「じゃぁさ……私がキーワード言うからそれに伴い言ってくれる…？」

「……あぁ…知っ…てるさ…お前達…の正体を…な」

「何…？」

とうとう高梨が口を動かす。

「お前達……、副隊長の…正体が……。」

「……」

「……副隊長…翠羽とか言ったか……。あいつは……」

「カウントダウン１０秒前……９……」

「あの女…は…
人間なんかじゃな……い」

「早く……８」

「アリス…になれ…
なかった…ただ…の」

「…７……」

「ッジャンク…
（壊れた娘）」

バギッ―！！！

鈍い音―すなわち高梨の腕は曲がってはいけない方向へと折れ曲がった―。

「アッ―アッ……」

「ごめんなさぁい…まだ
時間あったのにねっ…。骨逝っちゃったねアハハハ！！！」

「うあああああああああああ！！！！！」

高梨の叫声―
そして新羅の狂喜な声が
夜の歌舞伎町中に響き渡る。

「てんめぇ…！！」

銀時は気絶してぴくりとも動かない神楽を地面に静かに置き、高梨の元へ駆けようと体勢を整え一歩踏み出す。

が―真っ正面に佇む二人の何者かに真剣の先とクナイの先を首の筋に向けられた。

「此処は腹を括って黙って見ててくれないですか…？」

真剣を片手に持つは
真選組四番隊副隊長
奥平翠羽

「君は（神楽）その娘とあの眼鏡君の心配したほうがいいよ…。あの男より…ね」
クナイを持つは
翠羽の妹　奥平蒼琉

「くッ！！！」

言われるがまま、銀時は高梨の元へ行く足を止め、
「わぁったよ…」
そう告げると同時に
二人も刃を降ろした。

「さぁ……新羅はどうするんだろうね…。あの男のこと……。」

「へぇ…
そんな余計な情報まで知ってるんだ…。てことは琲瑠袈内部でもそのことを知っていない者はいない…そういうことね……。」「まぁ……琲瑠袈本部はあんたに聞いてもどうせそんな安々と口を割る人だとは思ってないから……」

―チャキッ！

鞘から刀を月夜に照らしながら抜き高梨の首元に近づける

「あんたはもう用済み。
死んでいった仲間によろしく頼むわぁ―。

次生まれてくる時は

道間違えるなよって…」

首元に近づけた刀の先を脈に留まらせ思いきり引き抜こうとした。

が　　しかし

ピピピピピピ―

一つの着信音がなる。
まるでこの状況を
みさからって鳴らしたかのように―。　　新羅は刀を持つ手は首
元から離さず変わりの手―
高梨の折れた
ぶらんぶらんな手を解きそちら側の手で携帯を取る。
その瞬間高梨は逃げようと試みるが、相変わらず片足は高梨から

離れる気配がせず頭をしっかり踏み付け逃がさんと言わんばかりに力を加えた。

「はい―連沢です。」

「……えぇ…えぇ……わかった。こっちも手柄は抑えた。こちらにも援護を―。」

ピッ―

電源を切り　携帯をパタンと閉じ、高梨の方に目を下に向けた。

「高梨……。祝〝なことにあんたら琲瑠袈のアジト私の部隊が発見したらしいわよ…。」　「！！！！」　内容に寄れば捕縛した

琲瑠袈のある一人の男を強制的に問い詰めたらしいのだが　そしたら

すぐに洗いざらいに吐いたとのこと。

「なんだか皆お縄に着いちゃったらしいわよ…。残念ね…私がアジトごと琲瑠袈内部全員肉塊にしようと思ってたのにほんとにざぁーんねん…。」

ハァーとため息を零し

眉をしたに垂らす。

「皆縄に着いちゃったからなぁ。アンタだけ殺してもねぇ……。
うん…
非常に残念だけどあんたも牢獄入ってもらうわ！アンタも運良かったわね。腕一本だけで済んだことだし」」ハハッ！と
口では笑っていたが

目は笑っていなかった…。

「まぁさっき援護頼むとか先に言っちゃったし今更悔やんでも駄目か…。」

刀を首元から外し
鞘へ刀を戻す。

ヴゥーン
―ヴゥーン！

「あっ！きたきた！」

振り向くと
隊士の４～５人が車内からおりてくる。その姿を確認したあと新羅は踏み付けている足を退かせ変わりに両手で高梨を押さえた。

「隊長！！ただいま
局長らが琲瑠袈の連中を縄に着かせたとの御連絡が入りました。」

「ご苦労……。私もたった今琲瑠袈の組織の一人を取り押さえたところ。すぐにこの男を局長の所まで。」

（今さっき…？何嘘こいてんだコイツ……。）

「それと……あそこに散らばっている死体の撤去作業も合わせてよろしく！」

「はっ！！」

隊士の二人は高梨を連行するが故高梨の腕を肩に回し車内へと連れていく。その内の三人は新羅があの時見境なく斬った女の真っ二つになった塊の撤去作業に移っている。

隊士達には２０？先の銀時の姿は闇にカムフラージュされており気づかれてはいなかった。

「いつまで座ってんの？　　早くこっちに……」

「！」後ろを振り向くと

いつのまにか新羅は新八を担ぎ暗い夜道を歩いていた。
「今日は迷惑をかけた。送っていくわよ……。」
暗い公道の真ん中には
不自然と車が一台明かりを照らし止まっていた。
「それに……
まだ話したいこともあるからね……」
そう言うと、後部座席のドアに手をかけ開けると、「どうぞ……」
と薄い笑みで車内に向かい入れる。
銀時は無言のまま、
神楽を担ぎ車内へと入っていく。その後ろに続き新羅も車内に入り、
パタン―と近所迷惑にならないように静かにドアを閉めた。

その車は
万事屋銀ちゃん宅へ
目的地へと　静かに
車を走らせた―。

人の質問になんでも返答できると思うなよ！！（後書き）

テスト終わったのでこれからなんとか投稿ジャンジャンできるようになりました！！かも…？

車の中では騒いでた方が酔いにくい

車を走らせ
約６分―
車内は　車に乗った当初から息苦しいふいんきに見回れていた。

一言も口を聞かず
後部座席に乗っている
両者互いの窓の外を
夜中で何も見えない
夜の道をじーっと
見つめていた。
聞こえるのは
車の静かなエンジン音―
両者の真ん中で肩を近づけスゥースゥーと眠る神楽と新八の寝息だけ―

「怒ってる？」
先に口を開いたのは
新羅―。
暗い夜の小路を見つめながら銀時に問う。
「……。」
「まぁ連れを傷つけられたんだもの怒らないはずないわよね……。」

「……。」
またしばらくの間沈黙の時が始まる。
「……なぁ」
かと思われたが
銀時は次に口を開く―。
「何？」
「奥平達は…？」
「翠羽達のこと？…さぁね……もうアジトにいったんじゃない？」
「……そうか…。」
「もっと違う事聞くかと思ってた……。」
「あ…？」
「気にならないの…？なんで私がテレビで報道されてまで事件を発展させたか。とか……。」
銀時は少し肩に力をいれると一気に肩の力を抜く。

「んなこと聞いたって…
俺達には何も得することなんてねぇしな……。」
そんな返答に一瞬目を丸くした。
「へぇ……存外この街にもそん気の利く人もいるのね……。
じゃあさ……
これだったら気になったんじゃない…？

—契約の話
—巻きますか？
巻きませんか？

っていうこと…。」

「！！！！」
目線を銀時にちらっと向けると銀時はぴくっと肩を鳴らす。
「まぁ…いくらなんでもあんな質問聞いたら嘸疑問湧かない人は少ないだろうね…。」
窓から視線を外し、
正面に身体を向き直すと腕と脚を組む。

「てめぇ……。
一体何がしてぇ……。
この街に……何しに来た。」
銀時も窓から視線を外し　両者ようやく
面と面を合わせた。
銀時の真剣な眼差しを
しばらく見るとニヤッ―と口を横に広げる。
スッ―と銀時の後ろを
指を差す―。
「着いたわよ―。万事屋銀ちゃん宅に……。」
「！」
後ろを振り向くと
いつのまにか
「万事屋銀ちゃん」
と書かれた看板のすぐ下の公道に　車が止まっていた。
「両方はキツイでしょ
…一人持つ…？」
「いい……。」
即答し、神楽と新八を自分の肩に担ぎ、外へ出る。

「そう……。
気をつけてね……。」

「……。」
無言のまま礼を言わず、　階段を一段上がった途端
「明日の2時、
てに～ずで待ってるわ。勿論その二人も連れてきてね…。明日全て話すわ。
契約の話も…人形の話も…

そして

薔薇乙女
（ローゼンメイデン）のことも…」

「？…ローゼンメ…」

「翠羽と蒼琉の自己紹介を合わせてね…！
銀時の言葉を掻き消すように言った。そして神楽へと視線を動かす。

「神楽の容態は明日になれば治ってるはずよ！なんせ夜兎だから治癒力も早いだろうしね…。」　「！！！！っ…てめぇなんでそ…！！」

人差し指を唇の前にたてシーッと銀時の声を消す。
「もう夜中の3時よ！でかい声出さないで！近所迷惑でしょ！

詳しい事は明日教えるから今日はこれで…

さようなら…」

笑みを零しながら
手を二往復振ると
パタン！とドアを閉め

車は真っ暗闇の行路を
進んで行きやがて姿形が見えなくなった。

「あの女…一体…」

そうぽつりと呟くと
階段を上がっていき、
銀時等も部屋の中へ入る。

「よろしいのですか…。あんな男に―契約の話などして…。」
運転手はバックミラーから新羅の顔を伺う―。

「言わざる終えないじゃない―。あんな光景見せちゃったんだし…。」

後部座席に腕、脚を組み座り黒一色に染まる
窓の外を見つめながら言う
「ですが……ローゼンメイデンはともかくまさか貴方の……。」
「冗談よして……。そこまで私もべらべら口叩く言う女じゃないわよ。」
「なら良いのですが…程度というものを知ったほうがよろしいかと……。」
「分かってる……。」
「なら何故そこまであの男に執着心を持っておられ……」
「大物が釣れたんだよ…。」
「ほほぉ…大物とは?」
「あの男……
白夜叉よ……」
バックミラーの中に写る運転手を見ると、運転手の顔つきが変わる。

「！！！白夜又…。

何処にいるかと思われましたがまさかこの歌舞伎町（街）に。

では計画は……。」

「実行する……。

必ずこの街にいるはずだから…」

「健闘を祈っております。」

「まぁ…

早くアジトに向かって…。土方に罵声浴びせられるの嫌だから…。」

「御意……。」

―異様に紅く染まる月と共に

数ある謎に満ちたまま…

今日という長い一日は

もう…

返ってはこない…。

車の中では騒いでた方が酔いにくい（後書き）

次はいきなり
てにーずに入った新羅達と銀時等の会話になります！

女の涙に男は弱い　Ｐａｒｔ１

「あのー……

えぇっと…？

ごっご注文…は？。」

「えぇっ…とね……

「ジャンボエビフライ定食」「スペシャルジャンボパフェ」に

「ジャンボ坦々麺」

「ジャンボステーキセット」「ジャンボクリームパスタ」「ジャンボカレーライス激辛味」「ジャンボポークカツ」　を下さい！」

「あ……はい…

かしこ…まりました…。」

店員は目を泳がせながら注文書に次々メニューを書いていくと、

後ずさりをするように

去っていった。

そりゃそうだろう。

銀時等が座っているテーブルの上には食べ終わった何十皿もの皿が段々積まれておりその大半が銀時と神楽によって軽々と平らげられていた。

「ホントに適当に頼んじゃったけど良いの？」
メニューリストをパタンと閉じると、目の前で皿にのってあるタラコスパゲティー
やらなんやらをまるで獣のように貪り食う銀時に聞く。

「あぁ…！！！じゃぁんじゃぁん注文ひろ！！！」

「ちょっと！銀さん！ジャンジャン！ってこれ
みんな新羅さんの奢りなんですよ！！自分が奢ってるみたいに言わないでくださいよ！」
「眼鏡五月蝿いネ！
おみゃえもさっさと食べるぃヨロシ！！！新羅が良いって言ってんだから
そりぇで良いあるじゃないアルか！！」

ガツガツ！と
カツ丼をブラックホール状態の腹へ入れていく。

「神楽ちゃんもだよ！！少しは遠慮ってことも考え…」

「良いわよ！！今日は
文字通り私の奢りだし！
思う存分食していって…！」

「よしっ！！神楽！！
今日はこいつの奢りだ！！食べ放題！！食えるだけ食ってその腹が悲鳴あげるまで食いまくれ！！」
「おうネ！！」

新八の注意を余所に二人の猛獣は再び皿の上の物に目掛けて口を開けた。

「ちょ……
新羅さん良いんですか？こんなに…。」

「良いわよ良いわよ！昨日の件で貴方達には色々迷惑かけたし、こんなんで許してもらえるなんて思っていないけど、少しでも罪滅ぼしになればと思って…。」
新羅は少し顔を俯かせながら言う。だがしばらくして顔をあげると今度は新八に向け頭を下げる。

「本っ当に申し訳ありません！昨日は琲瑠袈の件のコトもありあの男だけじゃなく新八さんにまで手を
出してしまって…。」
昨日の件……確かに昨日は災難な目にあった。新羅に気絶させられ、何より気絶させられる瞬間に「嫌いよ」などと言われたのだから。

「いっ…いえいえ！そんな頭下げないでくださいよ！ささっ！頭上げて下さい！」

言われるがまま、新羅は頭を上げる。

「確かに昨日は色々災難な日でしたが、僕もう気にしてませんから！対外の事は一、二日で忘れてしまいますし！」

ニカッ！と白く輝る
歯を見せ笑うと
新羅も少し微笑む。
「本当にすみません…。」

「神楽っ！貴方には身体に傷を負わしてしまった！
最悪の場合血管に穴が空く可能性も確率的に低くはなかった！本当にごめんなさい！！」

テーブルスレスレまで額を近づけ頭を下げる。

「んーいぃよいぃよぉ～！べぇつに気〝にしてな〝いからぁ～」
一方の神楽は、のんきに右手に巨大フランクフルト、左手にローストビーフを口に頬張り、その半分が何
言っているのかは聞きとれなかったがとにかく
神楽は昨日のこと
なぁんも気にしていないようだ。

鶏も三歩歩けば忘れる…
とか言うが人間（夜兎）も
一日立てば忘れるものであるのだろうか…？

「で…でも神楽っ？貴方
お腹に私のヒール刺さった…」
「あれぇだぁったらみょう治っだアルよ！私～
夜兎族だから治癒力
ハンパぁじゃないネっ！！！」

フランクフルトを皿の上に不安定ながら置き、自分の腹を新羅に見せる…。

そこには、昨日のことが嘘だったかのように傷一つのないただの夜兎特色の透き通るような白い肌が見えた。　「ちょっと神楽ちゃん！食事中に何してんの！レディーなんだしそれに他のお客さんにも見られ……あれ？」

どうも珍しい。

いつもなら、子供連れの
親子やら、ＪＫやらギャルやらメンズやら
少なくとも5席ほど埋まってるはずのてに～ずが妙な事に今日は銀時達だけの話し声しか聞こえないのだ。まるで貸し切り状態。

「いや貸し切ってんだけど？」
「はっ？」

突然新羅が口挟む。
それに「はっ？」と言葉をこぼす。

「いやだから貸し切り状態じゃなくて貸し切ってんの！今日は！！」

「えええええええ！！！！！」　一同騒然！驚く銀時！
だが銀時以外神楽と新八は席から立つ。

「ちょっ！貸し切りってマジのマジのアルか！！」
「本当にですか新羅さん！」
「ええ…マジのマジのマジでよ！」
ニコリと笑う。

「でっでも……どうやって此処の店…
貸しきったんですか？
それに…
…わざわざどうし…て？」

「フフフ…
新八さんも鈍いわねぇーそんな質問しなくても普通に考えれば分かる事じゃない？」

「えっ…？」
笑う顔とは裏腹、ゴゴゴっ！！と背中から殺気が放つ。頭上にはどす黒いオーラが聳え立つ―
親指と人差し指を丸るい輪を作り、さっきよりも
無邪気に笑う。

「金よ…。」　金よ…金よ…金よ金ょ…

「金よ…」という二文字の言葉が銀時達の頭を木霊するかのように過ぎる。
「「金あげるから此処貸し切りさせて」ってこの店の主人に頼んだらあっさり承諾してくれたのよ〇ω〇／いやぁ～金の勢力って凄いわよね！！まるで人間が駒のように動くんだもの…。」

（何さりげにやべぇ事言ってんのこいつ！！てかこの状況で顔文字使う意味あるのか？）
銀時の心の叫びはさておき新八はコホンっ！とわざと咳ばらいする。

「えぇっと…まっ…まあ
とにかく新羅さんには億万長者って事ですかね…？
あははぁ…。」

「億万長者なんて勿体ないお言葉。貸し切りに出した金は全て局長の銀行に入ってたお金を盗んできたものよー（笑笑　ゞ）手帳を鞄から取って口座番号適当に押して後は金を降ろすだけ…。ねっ！…簡単でしょう？」

「いや簡単でしょ！
って　アンタ何やってんですか！！　　アンタそれもうモノホンの詐欺でしょーがぁぁぁ！！」

新八の声は店内全域に響くだが周りからは冷たい視線を感じない。
そう今此処は貸し切りしてて人がいないからだ。

「詐欺なんてとんでもないとんでもない！勿論局長に承諾得たわよ！

「お妙さんの働いてるキャバ嬢が今破綻の危機に陥ってるらしいですよ。キャバ嬢…いやお妙さんの為にも局長の口座に入ってるお金お妙さんに費やしてあげたらどうですか？」って言ったら、
「お妙さんが居るからこそ我が命は今こうしてこの街に存在している」なんて言ったから
「じゃぁ私がお妙さんに渡してくるから、手帳私に預けてくれませんか？」

はい成立〜！！

そこからは貴方達のご想像にお任せしまぁす！！」
ズズっ―とホットコーヒーを啜ると、ハァっ！と一息つく。

「雑だけど大方こんなもんよ！理解出来たかしら？」

「理解ってもんじゃねぇだろうがぁぁ！！
まあ近藤さんのことだから騙されるのは丸見えだけど、アンタただ金だまくらかして金巻き上げてるだけじゃねぇぇかぁぁ！！それが警察のすることですか！それで警察ですかっ！」

「警察だって生きるに故はこういう事も大切なのよ！人を騙して騙して生きる！それが人間ってもんじゃない？」

「全ての人間がそんな汚い人生歩むと思うなよ！！！！！！」
「まぁまぁ…局長には言わないでね！あの人今必死こいてお妙さんの為に金費やしている最中だからそのうちまた大金が手に入る日もそう遠くはないからねぇ…」
目を輝かせながら窓の外の景色を伺う。

（駄目だ…この人と話してると自分の頭まで狂いそう…。）

新八―敗北を気した。自分の頭を狂わせないために

「ていうか、新羅さん。
今日翠羽さん来るんじゃなかったんですか？それとその友達みたいな―？」

「友達じゃなくて
翠羽の妹さん！そろそろ来ると思うわよ！
んまぁ…あの娘達の事だから入り口から入って来るとは思わないけど…」

ボソッと独り言を言う。
だが新八等の耳に
はっきり聞こえた。
「おい…どういう事だ。入り口から入って来るとは思わないって…。」
銀時は食べるのをやめ、新羅の顔を見る。

新羅は苦笑いをし
「いや…だからそのまんまの意……」
「遅くなったですぅー。
はいこれお土……産…」

「……だから嫌だって言ったんだよ翠羽…。もう皆集まってると思うからって……。」

パチっ―目が合う。
パチっ―顔を斜め？の
二重ガラス窓の方に。

パチっ―あれ？おかしいな…。なんで…人間がガラス窓から…？あれ上から吊されている…？いやワイヤーなんて見当たらないし、第一風吹いてるのに身体揺れてないし…？

まっ…まさか…！！

「いっ…いやあのね！先に言おうとは思ったんだけど…言うタイミングが無くて……ね。」

焦る新羅。

ドン引き顔の万事屋一家―

そして

「この娘達、1？くらいの鏡からなら何処からでも出入り出来るの…よ！」

翠羽ともう一人の女性、蒼琉が鏡の中から上半身だけがひょこっと出ていた。

「ぎゃあああああああ…！！！」

時計の針は午後3時

を回る。

楽しい愉しいおやつタイムは

絶叫の日和となった―。

女の涙に男は弱い　Ｐａｒｔ１（後書き）

銀）なぁなぁおい…

神）何アルか…？

銀）今回なんで主人公ほっぽいて眼鏡と連沢の会話が長いわけ？ごらぁー？

神）確かにそうアル！なんで私あんな食い意地張らなきゃならないネ！！もっと謎ディみたいなお嬢様風に食わせてもいいじゃないアルか！！

銀）いやお前は謎ディには向いてない。どうせなら
マツコ系でタラバガニを殻丸ごと食って後から口の中血の味になりーの蟹本店にクレームを言う方がお似合いだ！

神）てんめぇ！！！私を
一体なんだと思ってるアルかぁぁぁぁ！！！！！！

銀・亜麻音）
食べて寝て食べて寝て
う〇こしてまた食べて寝る暇人女。

神）それはてめぇらだろぉがぁぁぁぁ！！

銀・亜麻音）ぎゅあああああああ…！！！！！！

※良い子はバランスの取れた生活をしよ……ね…

―チーン…

新）あのぉ…僕は…？

女の涙に男は弱い　Ｐａｒｔ２

神楽　呆然…。
新八　唖然…。
銀時　失神…。

「ちょっ…銀時！大丈夫？口から泡吹いてる……てか魂半分出てる！！！」

新羅は開いた口から半分出ている魂を拳を魂に向けて無理矢理口の中に押し込む。
「ウップ！」

なんとか一命を取り留めた。白目から死んだ魚のような目に戻り、一応一安心？

「てか、翠羽達もいつまで鏡ん中から様子伺ってんのよ！さっさと降りてきなさい！」

「こっちへ来い」と手招きをする。
その様子を鏡の中から伺ってた翠羽と蒼琉はこくりと頷くと、天使が舞い降りるかのように鏡の中からスルッと出て　隣のテーブルに着地する

「ふぅー間に合ったですぅ！あっこれお土産っ！適当に食べて！」

「それはさっき聞いたっ！てかちょっと待てぇぇぇぇ！！！ごまかそうったってそうはいかんぞ！！！！どういうことですか！人間が窓から出て来るって！」

新八の鋭い言葉に翠羽と蒼琉は冷汗をかき、焦りながら

「い…いやいや何の事かなー？そこの窓開いてたじゃん？気付かなかったぁ？私達あっちの方から大砲に吹っ飛ばされて此処まで来たんです！ね…ねっ蒼琉！」

「そ…うそう！今歌舞伎町で主催している「大砲で何処まで飛べるか大会」やっているからねぇ！僕達も一応参加してこうやってきたんだよー？」

「何処がぁぁ！おもくそ窓のなかから上半身出てたでしょーがぁぁぁ！！」

「い…いや？だからそれは…」

「翠羽！蒼琉！
もう良いわよ……
…全て……この人達に話すつもりだったから……。」

ガムシロップの蓋を器用に開けてホットコーヒーの中に入れるとろーっと吸い込まれるようにコーヒーの中に入る。

「ちょっ！新羅！全て話すって何を……」

「おい…窓から出入り出来る事とその薔薇乙女（ローゼンメイデン）とかいう奴と何か関係あるのか…？」

「……えっ？」

キョトンとした開いた口が塞がらない翠羽。

「今……ローゼ…ンメイデン…って…」

「察しが良いじゃないの？そうよ…この娘達はローゼ…」

バッ―！

「ちょっと！新羅！
ミーディアムでも何でもない奴に何教えてるですか！！！このぼんくら共ただのド素人ですよ！ド・素・人！！」

胸倉を掴み、前後に激しく振る！！それでも新羅は顔色一つ変えずに
「ミーディアムになった人も全員素人でしょ？」
「だからって…」

「ちょっと待って下さい！！何なんですか！さっきからローゼンメイデンとかミーディアムとか意味わからない発言ばっかして！！」

新八の言う通り、この小説を見ていただいてる方々も
「はっ？何ローゼンメイデンって？ミーディアムって何？ミュージアムの間違いじゃなくて？」
みたいな
疑問を抱いてる方々も多々おられることでしょう。ナイスだよ！！
眼鏡っ？！

「そこ新八で良くないっ！！！つーか眼鏡の後に？つけるのやめてっ！！！腹立つから！！！」

ボソッ…

新八のツッコミなんて読者は興味ないんだよ。

さて次へＧＯ→

「あっ！そっか！

てか昨日あったことから話した方が話の辻合が繋がるかもね…。あなたたち昨日は気絶してたから話の読みがわからないのも無理もないし…。」

「昨日…？」「お教えしましょう…。昨日あったことを……全部。」

「そして……翠羽…。早くこの手を離しなさい…。」

新羅は昨日あったことを新八等が気絶した後にあった出来事を語り始めた。

琲瑠袈の存在―

高梨の本性・そして

本来の目的の事も…

「大体御理解頂けた…？結構解りやすく教えたと思うんだけど…」
さすがに刺激は強すぎたか…？テロ活動をしている奴がまたも仲間の仇討ちの為ごときに自分等の命を利用したのだから…
…と…そう思われたが

「じゃっ…じゃあ新羅さんは人殺しとかそんなんじゃなくそのテロ活動している琲瑠袈って組織の人間を潰そうとしましたが、琲瑠袈は表舞台には名が出てておらずさらには庶民という設定で表で生きてきたから
「連続庶民殺人事件」なんて変な事件で呼び名されてしまい挙げ句新羅さんがまるで犯人扱いになってしまったと…そういうことですか？」

「えっ……えぇまあ…。」
「良かったぁー。新羅さんが本当に人殺しじゃなくて…！！」自分の胸に手を当てると、ふぅーと息をつく。

「そうアル！！新羅は罪のない人間を斬るような馬鹿な女じゃないネ！！！」
新羅の顔を見ると華のある笑顔を新羅に向けた。
新羅は唖然とした顔で三人の顔を見る。

（なんで……？普通こんなこと言われたら誰だって…）

「誰だって落ち込むはず…！なんて思うんじゃねぇよ…。」

「！！！」

「こいつらはそんなもんで心曲げたり落ち込む程大層な奴らじゃねぇ……。」

新羅の思いを悟るように先に銀時はパフェに夢中になりながらも言う。

「そう……。確かに…。」

「そう言われてみればそうかもしれない……。」　何やらがみがみがみがみと小さい子供のように言い争う二人を見て、微笑んでいると、銀時は何かを思い出したらしく新羅の顔を直視する。

「連沢！だったら
なんでてめぇは組織内部の人間だけじゃなく表舞台で琲瑠袈に依頼した人間まで手に掛けている！」

「！！」争い事をやめ、新羅に顔を向ける神楽と新八。

「ピンーポン！
実はそこが今回重要な役割を持つローゼンメイデンが出てくるんよ

！」

ピースを作り、ウィンクをバチッ☆と決めるとピースを作った右手でフォークを持ち皿の上に盛ってあるスパゲティーをフォークに３６０巻き回しそれを口にパクッと入れる。

「……まず手始めにローゼンメイデンとは何か…？

まあ
ローゼンメイデンってのは要するに

人間じゃない…。」

「・・・・・・
人間じゃない…？

……！

えっ…待っままま……ちょっ！」

「簡潔に言えば
ローゼンメイデンってのは実は

・・
人形なのよ…」

「はいっ？」

「まあさっき翠羽に邪魔されたから言うタイミング削がれたけど私の後ろにいる

翠羽と蒼琉　……

ローゼンメイデン
なものなんで……

正確に言えば
ローゼンメイデン
第3ドール　翠星石
と

ローゼンメイデン
第4ドール　蒼星石

これがこの娘達の
本当の名…！

二人ともこの場で自己紹介を…」

「…私が真選組四番隊副隊長　　奥平　翠羽
んで
　　ローゼンメイデン
第3ドールの　翠星石　ですぅ…」　「そして僕が翠羽の妹
　　奥平　蒼琉　また
　ローゼンメイデン
第4ドール　　蒼星石
　　よろしく…」

「自己紹介は自己紹介だけど……

さすがに…
テーブルの上での自己紹介は無いでしょ…」

女の涙に男は弱い　Ｐａｒｔ２（後書き）

早めじゃないけど、自分では早めに更新した感じがするｗｗ

そういえばいつのまにお気に入り登録が増えてた！

どうもありがとうございます（・ω・）

お気に入り登録や感想等お待ちしていまぁすｗｗ

人形には感情ってもんがある！？じゃあ髪が伸びる人形って…

「にっにに！……に
人形！！！……」
三人は目を丸くする。
「えぇ……正真正銘
人形よ…

でもこんなことで驚いていたんじゃ話進まないから質問は後で受け付けるわ…

さっきの続…」

「おいおい…ちょっと待てよ…人形なんて言って脅してるつもりなのか知らねぇが…そいつらが人形だって証明出来ることあんのか…？」

「本拠ならあるけど…
翠羽・蒼琉腕を……。」

何を言い出すかと思えば、腕などとほざきだす新羅の顔を嘲笑うかのように見下す銀時。

翠羽は制服の袖を
蒼琉は着物の袖を

「あまり見せたくはなかったですけど…」　嫌々ながら捲る。

「よーく目を擦って見てみなさいよ。この娘達が人形だって証拠をね……」

「！！！！」

「これ……！」

わざわざ目を擦らんでも一目見ればわかる。

翠羽と蒼琉の肱は普通の人間とは異なる肱をしていた。人間の肱は関節というものがありそれがあるからこそ自由に腕を動かすことが出来る。だが翠羽達の腕は球体関節。普通の人間では有り得ない。

「見ての通り。私達人間とは違う腕をしてるでしょ？他にもこの娘達の膝とかも人間とは違う形をしている……

ごめんなさいね二人とも…。わざわざ。」

「大丈夫です…。」翠羽は一言申し…

蒼琉は無言のまま縁を戻す。

「脅してるつもりなんてサラサラないわよ…ただ私は本当の事を話しただけ…本拠まで根拠だってあるのだから信じてくれるわよね？」

「……。」

無論返す言葉がない。

「それじゃあ…さっきの続きといきましょうか…。

ローゼンメイデンってのはさっきも言ったとおり人形…

だけどこの娘達が今

こうやって生きていけてるのは　人間がこの娘達の首の裏にある鍵

穴にローゼンメイデンを目覚めさせる専用の鍵を入れ巻いたから。
それは
のちの“契約”に繋がる」
」

「契約―？」

「そう…契約とはローゼンメイデンとその人間がローゼンメイデンが嵌めている薔薇の指輪に
キスをすることで契約は成立する。契約をした者をローゼンメイデンの中では
契約者（ミーディアム）
と呼ぶ。
契約をすればその人間とローゼンメイデンは薔薇の契約を結ぶこととなる…だけど結べばそれ以上に代償というものも持つこととなる。
ローゼンメイデンは契約をすればより強力な力を得る。その得る力の原力は元は契約を結んだ人間の力。ローゼンメイデンが力を使えば契約した人間の力は消耗する。より強い力を使えばその人間は……死へのカウントダウンが始まる。」

「力を使うったって…普段こいつらそんな戦争みてぇなことすることでもあんのか？」「そう……言い忘れてたわ。
これは…ローゼンメイデンにとって一番大事なこと…」
「大事…？」「えぇ…ローゼンメイデンにはね…使命があるの。
その使命って言うのは

アリスを目指すこと」

「アリス…？んだそれ…？」

「アリス…どんな人形の中でも気高くてどんな人形よりも美しくて
一点の汚れがない。そのアリスは
必ずしも人形の中では有り得る存在……だけどその
アリスになれなかった人形

それがローゼンメイデン」

「！！！！」

「ローゼンメイデンは
第一ドールから第七ドールまでいて皆それは姉妹。皆それぞれ仲の
良い姉妹…。
だけどローゼンメイデンに与えられた使命…それは…

姉妹同士で戦い
一人生き残った人形がアリスとなること…

それが“アリスゲーム”」

「！……アリスゲーム！？」

「アリスゲームの勝者こそが本当のアリスになれる」
「だがっ…何の為に！！
アリスになる！！アリスになって何になるんだ！」

「それは……」

「お父様に会うことです…」

「翠羽！」

新羅が言いかけた時に翠羽は自ら口を開く。

「私達を造った人の顔は
姉妹全員誰も覚えてないです…。ただわかるのは
“お父様”という名前だけ。アリスになれれば…お父様に会えるです。

だけど…確かに！！
お父様に会いたいですけど！そんなのはおかしいです！仲の良い姉妹で戦うなんて…ましてや蒼星…蒼琉と戦うなんて絶対できないです！！だから…私達はアリスゲームをしないで…お父様に会う方法を考えてるです！

でも…私達以外のドールは目覚めてるのか…誰と契約をしているのか！　他のドール達が私達の
知らない場所でアリスゲームを始めているかもしれない……
それもわからない…

もう私は……嫌なんです！！姉妹が…戦う姿を見るのは！」

「お前等…姉妹で戦ったことあるのか…？」

「……一度だけ…ですぅ。七体全員で…

でも結果…決着は尽かず、私達はある馬鹿ウサギにより…そこで深い眠りに
つきました…。
気付いた時にはもう４０年の時が過ぎていたです。
　姉妹同士が会うなんて滅多にないこと…
私と蒼琉が今こうして会えたのは、本当に偶然に過ぎないですぅ…。

ですが…偶然にも
この街でもう一人のローゼンメイデン…私達の姉妹に会いました。
第六ドール雛苺（ひないちご）に出会いました。

　腕はもぎ取られ
　顔半分　輝が入ってて
　片方の脚が無…い状態で
　惨い様で
　　この歌舞伎町の
　　ゴミ捨て場で
　４０年ぶりの再会を果たしました…」

人形には感情ってもんがある！？じゃあ髪が伸びる人形って…（後書き）

ローゼンメイデンファンの皆さん！深くお詫び申し上げます！

私自身の勝手な想像を広げた挙げ句、雛苺を…あんな惨い姿で出番に出してしまいました。

前々からローゼンメイデンキャラ崩壊していますが　そういうところは

スルーでよろしくお願いします！！

＊感想・お気に入り登録よろしくお願いしますｗｗ

クラスのムードメーカーの長所は笑顔

「！その…
第六ドール…って言う
人形はなんで…
この街の歌舞伎町に捨てられてたんですか…！？　まさかそのミーディアムって言う人に…！？」

「違います…。

こっからは…新羅に話を進めてもらうと良いです…。翠羽は…もう…」

俯いた顔を上げることなく新羅にバトルタッチをする。

「やっぱ…同じローゼンメイデン…いや姉妹が一人居なくなったんだもの…。無理もないわ…。」

新羅も翠羽に顔を向けたがすぐに前に身体を向け、話を進める。

「ローゼンメイデンってのはね…自分の力だけではアリスゲーム……他のドール達に勝つことは出来ないの。もしそのドールがより強い人間と契約交わしたのならば尚更勝ち目はない。だからローゼンメイデンは数々の人間と契約を交わしては…切りまた新たな人間と契約しては切っての繰り返しをし、より強いミーディアムを探し回った。そのせいか…一時期
江戸ではローゼンメイデンの噂が流れ始めた。さすがにローゼンメ

イデンと
言えど、「動く人形」人形
なのに食べ物を食べる。寝る…笑う。ほとんど人間と何の変わらない。
だけど、

ある人間はこう考えた。

「動く人形（ローゼンメイデン）を売れば、
大金が手に入る。
持ってすれば俺達は
億万長者」だと。……」
情報が回ってきたのはその一週間後……。私達は急いで全てのローゼンメイデンを探しだし話した。
「このままじゃローゼンメイデンは人間達に売買される」
って…。

だけどある人形だけが…
一体の人形だけが…

その場にいなかった。」

「それが第六ドールってやつか？」

「えぇ…」
新羅は小さく頷く。

「まさか……って
最悪な事まで想定して私達は探した…。ちょうどその時、私達はこの街に来たばかりで真選組入って早々だったから、あまりこの街のルートが知らなくてね…。
この街にまさか居ないだろうって思いながらもまるで迷路のような街をさ迷って探してた。でもあるゴミ捨て場に差し掛かった時
ある服が目に付いた。ピンクのフリフリドレス。あの娘はフリフリが大好きだったし……話によれば
ピンクが姉妹一大好きだったらしいから。
私もあまり雛苺をよく知らないけど……
頭に顔よりはるかに
デカいリボン付けて
いつも笑ってたんだとよ…。

でも……私達が会った雛苺はもう雛苺じゃなかった。
　原形が留まっていなかった　惨たらしい様…。
アリスゲームをやったからこんな事になったのか…？って私は思ったから
ローゼンメイデンに
聞いた。だけど
聞いた話では、最初
ローゼンメイデンを買収

する噂が私達の耳に届いていた時に私達が行動した時にはもう既に遅し、　ターゲットは
第六ドール雛苺に絞られていた……。
あのまだ幼くて鈍い
馬鹿人形だから

まんまとそいつらに捕まっちゃったらしい。
雛苺はその時でさえ、
自分にフラグが立っていた事に気付いてなかっただろうしね…。
そこで売買するもの達が集まったらしいんだけど　どうも買収する連中が、雛苺を巡って揉めたらしくそのうちどっかの餓鬼みたいに雛苺の片方の腕を掴んで引っ張り合いっこしてたんだって…。
人形だからって
痛みが感じない訳じゃないし尋常じゃない痛みが身体中に走っただろうけど…。　ついには

片方の腕
片方の脚

とれちゃったんだって…

自分の姿を見て、痛みよりも先に
ショックを受けた雛苺はそのまま気絶…。

でもその売買側の人間達は

「死んじゃった」

とでも
思っちゃったんじゃない？
いらなくなった道具は
捨てるのが一般的。

そのまま
この街　のゴミ捨て場に

普通に

捨てた。

雛苺が目覚めた時
自分の醜い姿を見て言葉を失ったでしょう…。
お父様からもらった
ボディーが見るも無残なガラクタ（ゴミ）となって…。

そして…腕と脚がとれた痛み……。悲しみ…。　その痛みと
絶望…
哀愁に満ちた情を感じながら
雛苺は　……。
その直後よ…
私達が雛苺を見つけたのは、
雛苺からは
ローザミスティカが
身体から出てきていた
だから
この娘は
一生目覚める事はない。
アリスゲームにはもう　参加しなくて良いのだって……
…。」
「ローザ……？」

「ローザミスティカ…
人間でいう“心臓”
ローゼンメイデンは
ローザミスティカという
光輪を伴った結晶があるから生きていられる。言い忘れてたけど、
ローゼンメイデンがアリスゲームに勝利するためには、七体の身体
の中にあるローザミスティカを全て集めれば、その人形こそがアリ
スになれる。グロい言い方だと姉妹同士が七個の心臓を奪う合うゲ
ームってこと！」

「そんなっ…。姉妹同士で戦うなんて……

それに雛苺Sっていう
お人形…。
苦しみながら死んでしまうなんて…」

「人形に死…はないです…

ローザミスティカを奪われれば確かに私達は
ただのガラクタに過ぎなくなるですぅ…
でもガラクタになったとしてもアリスゲームが終わるのなら……私
は……」

翠羽の言葉に言葉を失う万事屋一同。

「……私達は
その売買人が誰なのか。

その組織は一体何処の組の連中なのか……

知るのにそう
時間は掛からなかった。
その組織ってのが

雛苺を手に掛けた連中ってのが

琲瑠袈だったから。」

クラスのムードメーカーの長所は笑顔（後書き）

銀）更新遅っせぇよ！！！！！

亜麻音）まじですみませんでしたぁぁぁぁぁ！！！！

（土下座ぁぁぁぁ！）

どんな天才でも人の考えることまではわからない

「だから…ミーディアム
以外私達を知る人間は
殺らなければならなかったです…もう…人間共の手で姉妹が消えてく姿なんて見たくもないですから…。
あの高梨っていう男もローゼンメイデンを知る奴です…あの時、
殺しておけば……。

琲瑠袈は
テロ活動もしている連中
ですから、私達が
ローゼンメイデンを知る
琲瑠袈を
消したとしても、

他人から見れば、
テロ活動を行う組織を潰した…。私達は善意と見做されるだけ…。
どちらにせよ一石二鳥です…。幕府にとっても私達からにとっても
邪魔な組織が消えたんですから…」

「だが…なんでそこに連沢が関係している？そいつはローゼンメイ
デンじゃないんだろ…？こいつは
琲瑠袈に関係していない

女まで手をかけた。」

「私は確かにローゼン
メイデンじゃないわよ。
だけど、
もし翠羽達が
下手に琲瑠袈に近付いて
連中を潰そうとしたら逆に奴らにローゼンメイデンだって顔が割れちゃうじゃない。そうしたら多分翠羽達は雛苺と同じ道を辿る事になっていたでしょう。
だから代わりに私があいつらに近付いて潰そうとした。だけど変な事件の犯人に仕立て上げられたりで…。

だけど、噂は琲瑠袈だけ
じゃなく本当極僅かな善良な市民にまで流れ込んでいた。悪いと思った。
けど…ミーディアム以外知られてはいけない…。

そして昨日の女はただの
市民だったけど
ローゼンメイデンを
知っていた。

だから

……消した」

「それは…つまり…。」

「私達が濡れ衣を着させてしまった……。」

簡単に言えばそういうことになる。無罪を着させてしまった…ローゼンメイデン（私達）のせいで。

「そんな…私は当然のことをしただけよ！だって私…翠羽のミーディアムじゃない♪」

「……へっ？」

あどけない顔の三人。

頭にクエスチョンマークを浮かばせて「ん？」と可愛く首を傾げる新羅。

「あれ？教えてなかった？私翠羽の（ミーディアム）契約者だけど！！」

「……えぇぇぇぇぇ！！！！！」

「ほらこれが契約の証♪」

右手の甲を見せると、そこには薔薇の指輪を親指に嵌めていた。

「契約すれば契約した人間も同じ指輪を嵌めることになるのがルール。翠羽にも同じ薔薇の指輪が嵌まっているわよ♪」

「まっ…真面ですか…！新羅さんが契約者だったなんて……。」

「えっ…何？もしかして嫉妬？
新八さん…私と契約したかったーとか？」
おちょくって言う新羅に、顔が梅干しみたいに赤くなり

「ちっ違います！ただ僕は…」

「童貞気持ち悪いアル…。しばらく私に話し掛けないでくれるアルか…。」

「そこマジ退くのやめてぇぇぇ！！！」ピロロロロロ―

一つの着信音がなる―。

「私のだ…」

新羅は真選組制服のポケットから携帯を取り出す。　携帯は綺麗にデコレーションされており、大量のキーホルダー等がジャラジャラついていた。

名前表示を見ると、

［ドSコノヤロォ］

「……」

どう考えても
ドSと居りゃぁ
あいつしかいない。

「はぁい…もしもーし？」

「あっ…新羅か…いきなりで悪いがちょいと質問があるんだが今大丈夫ですかィ…？」
どうやら質問があるらしく電話寄越したらしい。
「うん！何ー？」
仕事の件だろう…。
と皆思った。

新羅以外は……。

「俺と土方さんどっちが
副長に相応しいか決闘すんでさぁ…新羅はどっちが勝つと思いやすか…？」
「総悟！！！俺がいつてめぇと決闘するなんて言った！」
「早く決めてくだせぇ…
野良犬がマヨネーズ食いたいってほざきだしたでさぁ…」

「んだと鬼畜系が！！！おい連沢！ふざけた返答すんじゃね…」
「やっぱ相応しいのは総悟じゃないかしら♪♪」

「……」

（ふっふざけた返答したぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！）
「つ…連沢ぁぁぁぁ！！てめぇ後でどうなっかわか…」
ピッ―

土方の話などまんじりとも聞く耳持たず携帯をきる。　今ので土方の機嫌は更に　上へと上昇！火山噴火するくらいに！だが
　新羅はもしかしたら
　土方の機嫌を更に損ねる為にわざとこんな行動をとったのかは知らないが…。

「時刻は４：２５…か。かなり時間潰しちゃったわね…。」

「あーそうですね…もう空が紅いや…！僕達もそろそろ帰りましょうか？」

「えー！嫌アル！もっと新羅と話してたいアル！！」

「また今度ね！」
駄々こねる神楽に笑顔を振り撒く。

「私レジ行ってくるから、貴方達は先に外出てて！」

「了解しました！」
新羅以外はてに～ずを後にした……だが銀時はちらっと新羅を見ると神楽達に手を引かれてに～ずを後にする。
しばらくすると
てに～ずから新羅が出てくる。

「すみませんわざわざ…
いくらでした…？」

「フフっ…内緒よ内緒！」

だがあの皿の量。値段に
訪わず数々の物を頼んだ訳だから軽く三万はいってることは間違いないであろう。
　でもそのお金は近藤さんからだまくらかして奪ったお金だから新羅は嫌な顔一つしていない。桜が満開したような満面な微笑み。

「今日話したこと言った事誰にも言わないでね…。
それとこの娘達の本当の名…翠石星、蒼石星…ってことも…。今までどおり翠羽と蒼琉で…！」「分かりました！！」

「なぁ…連沢…。てめぇ……

死んでるのか…？」

「…はい？」

気が狂ったのかわからないが銀時は訳のわからないことを話し出す。

「お前、あのコンビニ事件の時、てめぇと俺は手を交じらわせた。だがてめぇは何か察知したみたいに手を振り払った。その後神楽やぱっつぁんがきた時、ぱっつぁんが手を指し伸ばしても手を交じらわせず神楽の時も同じ。
そしててめぇと
手を取り合った時にてめぇからは
温かみを感じなかった。人の体温はそうそう普通どんなに真冬の日でも少しは温かみを感じるはずだが、あの日はそこまで寒くはなかっただった…てめぇの手はまるで死人のように冷たかった。」

「……かなの」

「？」

「アンタッ馬鹿なのですかぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！」
翠羽は、
銀時の股間におもいっきしスピードのある蹴りを食らわす。股間を抑えながら
地面にうずくまる。

「アンタ最っ低！！！！！！人！死人呼ばわりするなんてマヨネーズ鼻にぶち込んで即死させてあげたるかこらぁぁ！！！！」

口調！！！！口調！！！
なんかキャラ違くない！！！！！！

「んなこと言ってる場合じゃないです！！！！良いですか！！！！！！！！！！！！！！

「そ…そういうことなの…ごめんなさい変な誤解招いちゃって？私ホント
酷い冷え症だからよく
「大丈夫？」とかそういう
声かけられるんだけど
なるべく
手は交わさないことにしてるの…。
手を交わせば「大丈夫？」
とか聞かれるし、なんか心配してくれるのは良いんだけど余計傷付くって言うの？だから絶対交わさないと思っていたら
ノリで交わしちゃって
途中交わしたことに
傷付いてあんな酷い振り方しちゃったってこと。ごめんなさい…」

「あっ……ああ…こっちこそ……な…」股間が上にあがりなかなか下に降りて来ないため痛みが尋常じゃないほど下半身を痛めつける。

「……。翠羽も謝りなさい。銀時将来子供作れなくなったらどうすんのよ…。」

「知らないですぅ…！死人呼ばわりしたそっちが悪いんですから！」

そっぽを向いたまま顔を合わせようとしない。

「……

意地だけは張る女なんだから……」

―約四分たったころ
銀時の股間の痛みも引きすっかり直立―まではいかないが立てるぐらいに回復した。

「んじゃ私達はこれで…
あなたたちも帰り気をつけてね。」
「はいっ！ではさよならー！！！」

背を向け歩きだす。

だが　そこで両者側の空気が変わる。

両者―考える事は違う。（たがう）

良い人ほど腹の中は真っ黒黒すけ

「新羅さん達の話なんか凄くビックリする話もあったけど……
ローゼンメイデン…
生きた人形…か」

「かわいそうアル…！姉妹同士で戦うなんて……
あっ…そういえば…
銀ちゃんはなんであんな事聞いたアルか…？死人なんて……」

「…どうも臭えーんだ…
あいつら……。」

「？」

「あいつら……まだ俺達に何か隠してやがる…。」

「銀ちゃん（さん）？」

「たくっ…なんでミーディアムでもないやつにローゼンメイデン教えなくちゃいけないですか…！」

「そうだよ！新羅…新羅が翠羽のミーディアムって名乗るなんて思わなかったよ。」「そういえば蒼星石は誰と契約したですか？」

「それは言えないよ…
翠星石」

「なんですか！姉に言えないなんて！！！
けちん坊蒼星石！！！」

「あっ…私途中でお団子買ってくるから貴方達は先に屯所に帰って…！」

「えー翠羽も行くです！！」

「多分副長争いがどうのこうので土方と沖田のことだから屯所とかめちゃくちゃにしてると思うんだよね！先に帰って二人を止めてくれない？崎とか絶対瀕死状態だと思うし他の隊士達も……」

大体予想はつく。近藤とかもうフルチンで魂抜けていそうだし。

「じゃあ僕は帰るよ！君達みたいに僕は街護る為に警察になろうだなんて思ったことないし。それに僕にはマスターがいるから…。」

蒼琉にもミーディアムがいる！。翠羽には翠羽のミーディアム。それぞれの志は違う。ましてや

蒼琉は真選組とは全くの無関係。一緒に住むのは不可能なこと。

「そう…会える日は少ないからね……。今日会えて嬉しかったわ…。また会える日を…。」

「バイバイです蒼星石！」

蒼琉はそのまま夕暮れの道を一人歩いていき姿が見えなくなると

「じゃあ私ももう屯所に帰るです！新羅も早く帰ってきてくださいね…」

「ええ…また…」
翠羽は走って蒼琉とは逆の道を走っていった。

「あの娘達も馬鹿ね…。
ローゼンメイデンなんだから窓に入って帰っていけば良いものを…
…」
一人佇む道でクスッと笑う。

「死人……だってさ…。
とうとう言われちゃったね。」

独り言をぽつりと言うと、
前に歩きだそうと一歩踏み出す。

…が

何かに察知したらしく

後方に身体を素早く向ける

―誰もいない…

夕日の色に輝く道が後ろに永遠と続き　電柱がところどころ立っていて

改めて見ると
気味が悪い―。

「私を就けにきたか…。」　一言言うと、

強い風が新羅に目掛けて吹く。

そんなことお構いなく
また前を向き
そのまま
オレンジに照る公道を歩く。

浮かび上がる黒く長い陰―。

陰が映し出した

のは

光（希望）？　陰（絶望）？

良い人ほど腹の中は真っ黒黒すけ（後書き）

次は万事屋銀ちゃん宅に帰ってきた三人の会話です↓

騙された後の後悔は重い　Ｐａｒｔ１（前書き）

今回はちょっとした番外編的なものです！

騙された後の後悔は重い　Ｐａｒｔ１

現在：５時半を過ぎた頃

万事屋一家は
我が家「万事屋銀ちゃん」宅に帰宅していた。
その中での会話である。

「いやぁ今日は
食った食った！明日の朝飯食べなくていいんじゃねぇか？もう…。」
自分の腹をパンパンと叩き腹一杯だというサインを送る。

「駄目アル！！！私明日の朝方３時になったら腹の虫がピギャーピギャー喚くアル！朝飯抜きなんてジョーカーの入っていない婆抜きと同じネ！！！」

餌皿からはみ出る程の大量のドッグフードを盛りながら銀時に言う。
その間定春は目が輝いており舌を出したり退いたりしている。

「何がピギャーピギャーだまるで雨の道の中車で
轢かれた瞬間声を上げる蛙みたいじゃねぇか！」

ピギャーを轢かれた蛙の声と例える銀時。
「銀ちゃん…蛙轢いた事あるアルか？」
……。
「俺はそんなグロテスクな事はしねぇぜ…。
道端に蛙がいたとしたら
ちゃぁんと避けるしな～！
どっかの作者と違ってな～！」
にんまりと黒い笑みをこちら（作者）に向けた。てか私に向けた…
…！。

あはは～何の事…かなぁ…。
そんな事より
次進め…。
「皆さん聞いてくださぁい！この人ー今年の夏に部活帰り友達と帰ってたらしいんですけど」
ちょっと待っ……！
「途中友達と道分かれる時にバイバイって言いかけた瞬間「ピギャーグチョッ！！」ってなったらしいですよぉー♪その瞬間
「…蛙…轢いた…」って

思ったってププー♪

そして友達には笑われ作者は恐怖に怯えてその日は終幕えたって言ってましたが…

次の朝自転車を見たら

前のタイヤの一部は紅い液体がついており、友達と

その物体を轢いた場所に行くと……どんぴしゃ

内臓が破裂して紅い液体が回りに飛び散っていてちゅんと自転車の轢いた後がくっきり残っていた蛙が居たんだとさ…。

あああああああああああ…！！！！！」

腹を抱え笑う銀時。

その話は忘れたはずなのに…泣泣））

「真面アルか！！亜麻音轢いたアルか！！！ほんまに轢いたアルか！ねぇねぇ轢いたアルか！！！」

轢いた轢いた連発しないで…。心が痛い。

「って！なんで作者の重い過去知らなくちゃいけないんだぁぁぁ！！！なんで

番外篇でもないのに作者出て来てるの！！！作者もう体育座りしてライトアップされちゃってるよ！！！

もう絶望に絶たれてるよ！辞めてあげよ！ねっ！」

新…新八さん…。

作者こと私に少しだけ笑みが零れた……ぁが…

銀時は口を尖らせ
「えー嫌だしぃ♪俺この頃あーだこーだでストレスたんまりなんだよ！」

「何ストレスって…」

「そんな時やっぱ人虐めて痛め付け暴虐まではいかねぇが弱りきった所で釘を刺す！Ｓって最高だよなぁ！
あの作者の顔絶望に
満ちたあの顔！ＦＵ～♪」

わざとらしいあの顔…。
諸行無常で天罰を出食らわしてやろう
私はとうとう堪忍袋の尾が切れた！作者（わたし）の
顔の前に一本の紐が垂れ下がる。
それをおもいっきし引っ張る。

「何何～亜麻音ちゃーん♪それ何のひ…グベァッ！！！！！」

天井一部が開くとそこから数個の盥がおちてくる。
それの下敷きとなる銀時。
ゆっくり立ち上がる。
「…今度その話私の前でしたら……

目玉ほじくるぞっ♪」

殺気っ！！作者からの殺気はどす黒い黒を纏ったオーラが笑顔とは

裏腹に漂う。

「んじゃっ話進める為に私はそろそろ♪ばいばぁい♪」

新八と神楽には満面な微笑み。銀時には冷酷な目。冷たく感情の一つもないあの目は銀時だけでなく神楽と新八にも恐怖に怯えさせた。作者は盥が出てきた所へ登ると天井を閉め三次元へと帰っていった。

――――二分後――

ようやくまともな話が始まりますねっ♪ではどうぞっ！

「えぇっと…まぁ話変わりますけど……

銀さん…ほんとにあのままで良いんですか？」

「あっ？」

新八の質問に、適当な返事をする。

「今日の奢ってくれた分のお金の件ですよ！本文には軽く三万とか言ってましたがあれ絶対一桁じゃ済まない量でしたよ！いくら近藤さんからだまくらかした金だからって近藤さん困ってるはずですよ！」

「大丈夫だよ！あの女…
お妙んとこのキャバに費やせば？とか適当な事言って事は終えたんだろ？心配すんなよ！」

「私さっき新羅が手に握ってたレシートちらって見たアル。

３０万越えだったアルよ…」

「……。」

「大丈夫大丈夫…」

「大丈夫じゃねぇだろ！！！！！何３０万越えって！！てめぇらどんだけ高級品頼んでんだよ！！！！！」「私、そんな高級品頼んでないアル！軽くＳランク和牛ステーキっての５回くらい頼んだだけアル！後は皆安物ネ！銀ちゃんもＡランクの和牛ステーキ三回くらいだったアル！」

「それじゃあ諸二桁行くわぁぁぁぁ！近藤さんマジでヤバいですって…！キャバとかそんな関係なくっ！あっ！
そういえば
家には高梨さんからもらった１０００万円あるじゃないですか！！
それちょっと分けてあげましょうよ！」

ポンっと右手の拳を左手に落とす。良い案を出したとばかりにジュラルミンケースに小走りに向かう。

「はぁー！！冗談じゅねぇよ！！！その金は俺達のもんだ！！！あんなゴリラに渡したところでバナナ代にしか変わんねぇよ！」
「あんな税金泥棒なんかに渡したらそれこそ血に泥を塗るようなものネ！」
真選組には渡さんとばかりに二人は淡々と暴発的な事を新八目掛けて吐く。
新八は「僕に言われても…」と呟く。
「でもそんな事言わずに、ほんの少しだけで……」
ジュラルミンケースを開けた瞬間、
新八は言葉を無くした。
「おーいどうした？新八君金の束見てあまりに衝撃走ったか？」
眉間にシワを寄せて肩眉がぴくぴく上下に唸る。
「あっ……あの銀さん…これ
金の束じゃなくて……

紙の束です……」

「はい？」

騙された後の後悔は重い　Ｐａｒｔ１（後書き）

何故私こと亜麻音が出てきたのか自分でもさっぱり。

小説内にかいてある蛙事件は

あれ……

事実です…。

「目玉ほじくるぞ☆」

とか書いてあるけど

逆に

私がほじくられそうですね。

銀さんや銀魂ファンの皆さんに（汗、

騙された後の後悔は重い　Ｐａｒｔ２

新八の冗談ぶりにやれやれと両手をヒラヒラさせる。

「紙の束？

冗談きついぜ新八～！

とうとう眼鏡の度合わなくなったんじゃねぇか？
眼鏡センター行ってきて
巨乳美人さんにでも
診察してもらいな　童貞！」

最後の言葉にグサッと刺さるがそんな事はおいといて新八は急ぎ足で金の束…紙の束が入ったジュラルミンケースごと銀時の前まで持ってくる。

「良く見てみて下さい！！外側にあるのは一万円かと思えば玩具の一万円札！！そして中身はほらっ！
あーら不思議
真っ白けっけの紙の束！

状態ですよ！！！」ほんと…
あーら不思議状態っ！

新八の言ってることは冗談なんかどはなく誠に事実であった。玩具の一万円札が四方八方に広がっており、一万円を一枚めくれば真っ白けっけのコピー用紙が一万円札の模りになっており「こんにちは」と顔を覗かせていた。

「銀さんっ僕達騙されたんですよ！！！高梨さんに！！！金で動かされたんです！それも偽物の！！！」

「ハッハハハハハハ…。

じゃあ何
俺達嵌められたってか？
命金で買いやがってそれに乗せられた俺達は今この場で事実しった。
これで俺達はご愁傷様って訳か…。
酔狂な話だねー

へへっあハハハハハ……」

ガッシャアアアァン―

「冗談じゃねぇぇぇぞぉぉぉぉ！！！！！」

ジュラルミンケースを壁に向かってスパーキング！！見事にケースは木っ端みじんに砕け堕ち、蝶が舞うように紙の束が美しく入れ雑じれ舞う。

「ざけんなごらぁぁぁぁ
高ァ梨ィィィィィィいい！！！！！」

……

「何だね騒々しいね…」

煙草を加え天井を見上げるのは「スナック　お登勢」の女主人　お登勢。

「ドウセマタ喧嘩デモシテ騒イデイルンデショ。関ワルダケ無駄デス！シカトシカト！」

片言口調の猫耳叔母さ「オネエサマ…」

おっ…お姉様ことキャサリン

「お登勢サマ…」「あぁ…頼むよ…。」

騙された後の後悔は重い　Ｐａｒｔ２（後書き）

絡繰り家政婦ことたまは
お登勢に頼まれた通りに仕事を熟した。（こなした）

２階へ上がり、銀時達を黙らせて来いと同時に

家賃収納してこいと―。

良く女達のコショコショ話を男が盗み聞きしてると「レディーの話に首突っ込ま

サブタイ長っ！！
自分でも思った。

こんな長いサブタイ決めたけど小説本文とタイトルはあまり深い意味はない（笑）

良く女達のコショコショ話を男が盗み聞きしてると「レディーの話に首突っ込ま

――屯所にて――

屯所に帰宅すると
予想通り土方と沖田の激しい攻防戦が繰り広げられそれを止めようにも止められなかった局長こと近藤勲はどんぴしゃフルティン姿で隊士達に看護されていた。翠羽が来援したため、事はそう長くは続かなかった。
えっ―？
どうやって
二人を止めたかって？

翠羽……

キレると「鬼の副長」より倍怖いよ……。

――――

夕飯を食べ終えた女隊士
二人は自分の部屋へ戻り　隊服に着替えようとしていた。

そう

今日は　新羅達の

――――巡回日。

「新羅ぁー何度も言いますがなんであんな連中にローゼンメイデンの実情教えたですか？」

自分の髪を丁寧に解く翠羽。その問いに飽き飽きと

「……仕方ないでしょ。あの時私口滑らしちゃったんだから言わざる終えないじゃない…。」

「でも……新羅は私のミーディアムなら知っているはずです。伊達に噂が漏れればまたローゼンメイデンの中で犠牲者が出るんです！！だから私達はミーディアム以外私達を知る人間は排除してきたんです。それに新羅も賛……。

なのにお前は……姉妹をまた消してくつもりですか…」

「そんな事誰も言ってないじゃない…。私だって信用できないって思った人間ならまっ先に肉塊にしてるわよ……」

「信用……できない？んじゃぁ…」

「私は信じてる。
あの三人は…万事屋さんは
…絶対…

約束は破らないって…。」

「そんな証拠…一体何処にあると言うのですか…。

第一私達はこの街に来たばかりで

此処の人間達が
どういう奴らなのか…。

信頼得る的（まと）
存在が

いるのかまだわからない…

信用するなんて…。

まだ早過ぎです……。」

ローゼンメイデンにとって今や人間の存在ミーディアム以外は敵意として見なされている。そう簡単に人間を信用しようとしてもせざる終えない事は新羅自身も充分理解している。

女のコショコショ話って大抵くだらない事だから盗み聞きしてもそこまで価値は

「翠羽……

確かに貴方達の姉妹は人間達の手で消された。
そりゃ信用するなんて

人間は……

愚かだから…。

勿論私も…。

でもね…

万事屋（あの三人）だけは違かった。

普通の人間にも私にも無い　何か…」

そこで言葉を止める。

「何かって一体っあの人間達に何があるっていうのですか…？」

翠羽の問いに新羅は小さく首を振る。

「その“答”は
貴方自身が見つけないと意味がない。貴方がその
“答”を知った時貴方は
多分人間達と…」

「悪いけど……。

私はミーディアム以外の人間とは交流を深めようとも間柄を築きあげようとしたことはこれっぽっちもないです。ましてや此処のポリ公共とは仕事付き合いの為だけにああしてマヨラー共と話してるだけで…。正直なところ

人間なんて……。

ただの

ジャンク…。」

「翠羽！！！」

「！」

突然、新羅が大声で自分の名前を言ったものだから

ビクッ！！と肩を鳴らす。

「むやみやたらとその言葉を軽々しく口に出すなって何度も言ったはずよ。」

ギロっと暖かみのない目で翠羽を睨む。その目を見た翠羽はまるで金縛りにでもあったかのように身体が硬直する。

「ご…

ごめんなさいです…。」

頭を下げる

…と

フッと一瞬にして新羅の日常の顔に戻り

分かれば良しっ！

そう発すると、すたすたと廊下を歩いていき

翠羽もすぐに自分の髪を櫛で解かし終わると新羅の後に続いてその背中を追うように早足する。

普段あまり長いと思った事がない廊下が何故か今では彼女を追ってるだけというのにとても長い感じがした。

―まるで

どんどん新羅が

翠羽（自分）から存在が遠ざかっていくかのように。

そんな廊下を歩いていき、やっとの事で新羅に追いついたと思いきやふと立ち止まった為。

翠羽も歩く足を止める。

「どうしたですか…？新…」

「賭けをしましょう…！」振り返り、自分の頬の近くに人差し指を立てる。

「かっ…賭け？？」

思わず聞き返す。

「もし貴方がその“答”というものを見つけられたらその時は貴方の勝ちということでミーディアムとして私が貴方の……何だろうなぁー…まあ単純に欲しいものいくつでも買ってあげる。

もしその“答”を見つけられなかった場合私の勝ちだから……

その時は……

貴方が私の言いなりになる！

どう賭けてみない」

「それ翠羽のほうがリスク高いじゃないですかっ！！それももし私が負けたら、逆の立場になるって冗談じゃないです！」

契約者（ミーディアム）より人形（ローゼンメイデン）のほうが境遇が高いとでも言いたいのかその賭けに応じようとはしない様子

「私はそんな賭け絶対乗りませんから。」

ボソッと言葉を吐き

新羅の後方にいた翠羽は新羅の横を通り過ぎ観点を変える。

「ひっ……酷いっ！！」

顔だけ振り返ってみると両手で顔を隠しながら歎く新羅。

「私は…貴方の為を思って
善い（よい）妙案を考案したというのに、
そんな簡単に拒絶するなんて…」
ウ゛ッウ゛…
…と泣きまねを
してる事はお見通しなのであえてそこはツッコまず話を続ける。
「だから…というより新羅が考案した私だけリスクの高い賭けなんざ誰も受けないで…」
「だったら万事屋さん達に…本当の事言います。」
怪しく引き攣るその唇。
「何をです。」

「翠羽は蒼琉の双子の姉で実際気が強いけど
実はローゼンメイデン
第一ドールには魂削る程ホントは弱い人形で一度泣かされた事があって
ホラー系大好きだなんだ言ってるけどそこまで怖くないホラー映画を見たその5分後早々涙ぼろっぼろ流しながら私に抱き付いて来たり〜…」
「…」
「後ー“プロフィール”に書いてある翠羽の身長の事だけど１６１．

８ｃｍって書いてあるけどあれはピンヒールブーツを履きながら背伸びした時の高さプラス
あのブーツ
「シークレットブーツ」ってやつで普通のブーツよりも踵の高さが１０ｃｍ高いやつで実際翠羽がブーツを脱ぐと本当の身長が分かるんだよ。本当の身長は１３……」
「だあああ！！！
分かったぁ分かったです！！！乗ります乗ります！
リスク高いのなんて糞くらえでその賭け乗ります！
だから言わないで下さいです！
そして早く巡回に行くです！」

「はいはい…」

便乗したため新羅の顔は笑みで溢れていた。
その顔を見てムスッと顔を蒸らせたまま背を向けると、ぶつぶつと文句を言いながら廊下を後にした。

その廊下に今いるのは

新羅一人―

その笑みから瞬間的に苦笑いに変わり、
視線を三日月へと向けた。

「これがあんたの為なんだよ…。分かって…翠羽。」

三日月に語り掛けるように言うと

その後は

翠羽と共に巡回を始めた―

浪士共の
動きが見当たらなかった為
その日は早々と巡回を切り上げた。

新羅達はまだ知らない。

宇宙(そら)から

一隻の　戦艦が

地球(ここ)に向かっている事なんて…

女のコショコショ話って大抵くだらない事だから盗み聞きしてもそこまで価値は

銀）一隻の戦艦ー？

それって…？まさか……

悪の華は美しき炎（はな）（前書き）

あの方々のご登場！！！

悪の華は美しき炎（はな）

――それは遠い遠い銀河の果て――

光年まで続く宇宙（そら）には何千何万ものの星が光っては滅び光っては滅び
の繰り返しをしていた。

どっちが前で後ろなのか
どっちが左なのか右なのか見回しても分からない宇宙（そら）からは
一隻の戦艦が地球（ここ）を目的（まと）とし向かいつつある。

その
戦艦の外部には
あるマークが刻まれていた

『春雨』

―戦艦内部にて―

「また地球へか…ハァ元老(うえ)も元老(うえ)だね…。」

幾度もため息を付く長身大男　阿伏兎

「俺は楽しみだよ…またその“侍”って奴に会えるんだから」

オレンジ色の髪を一本のおさげとして結ってあるは神楽の兄　神威

「けっ！呑気でいられて良いなぁあんたは…

すっとこどっこい！！」

「んで今回は何処に用事？やっぱり江戸…？」

「あぁ…おまぇさんの

大ぃ好きな侍とかいう奴のいる江戸だよ…。」

「そっか…だったらより

一層楽しみだな…」

「おいおい…今回ばかりはおまぇさんのお遊びに付き合ってらんない

いんだよ！」

「へぇ…手厳しい。」

珍しくも真面目な顔をする阿伏兎に「ホ」の形を作る神威

「俺は何時だって真面目だよ！！」

それは失礼。

「まあいいさ…。おまぇさんも上からの指示忘れちゃあるめぇよ…。」

しばし黙り込み頭の中を探る神威

「あぁー人探しとかの！」

「そうそ…その人探しの手掛かりになるのがこの写真だ。」

所々破けていたり血が付着した一枚の写真を神威に渡す。

写真に写る人物の顔見をし首を傾げる。

「…誰この女。」

「さぁな…名は確か

園原　羅音

（そのはらりおん）とか言うらしい。」

「後の情報は？」

「何もないさ…手掛かりはこの写真と名だけ…後は適当に見つけてこいって上からの指示だ。全く人使い荒いよなぁ…上も。」

ひょいっと神威から写真を取り上げる。

「こんな女(アマ)さんを写真一枚でどうやって探せっていうのか。そしてなんで上はこの人間を必要としてるのか。」
「ふーん…まっ頑張って…」
「待てーぃ！今回ばかりは自分だけ楽しようなんざさせやしねぇーよ」
アップ口にする。
「えぇ…だってせっかく地球行くんだから侍とかいう奴と闘ってみたいし、最もは銀髪のお侍さんとだけど…。」
笑顔の裏の夜兎の本性。
「いいか？今回は俺達第七師団だけでの捜索だ。情報網が少ない元(もと)で探すのにだって時間はいつもの倍は欲しいとこを短期間見つけ出せっての事だ。
耳かっぽじって知っておけ。」
「知ったから後は頑張れー！」適当に手をヒラヒラさせる。さすがにこのままではと悟り焦る阿伏兎
「分かった！分かった！事が終わったら帰還日まで空いた時間は思う存分アンタの好きにしていいから！」「なら良いやっ！」
顔色が一瞬にして綻びる。ほんと気まぐれだよなこの団長も…
「……我が儘な上司だよ。ほんと。」　再度重い溜息を零す。
「ああ…もう一つ情報があった。」
「？」

「その女(あまさん)は
そこらへん無能な女じゃないらしい」

「てことはつまり…？」

「戦闘能力は有りな女だと聞いた。人斬りまではいかねぇがな…？
まあ俺達ほどじゃないが…」

「へぇ～
じゃあさ……聞くけど

その女

強いの？」

「さぁおまえさんの期待に応えられる保証はないぜ…」

興味津々に聞いてくる
団ち…提督に少々焼く。

心の中もため息の色で一色に染まる。

俺の血はその言葉を聞き　疼いた。

多分この女も血に飢えた哀れな兎―

こいつからは

同じ血の臭いがする。

俺の血は

何時(いつ)渇きがとれるのだろうか？

銀髪の旦那と殺り合うまでは渇きがとれないと思ったけど

この女は

俺に

初めて

血を（俺を）騒がせてくれた

期待しても良いのかな？

期待の前に

愉
し
ま
せ
て
くれるのかな？

血で血を潤させる。

そう

鮮血な血で

この女と―

―銀髪の旦那

どちらが

血に　相応しいのかな？

悪の華は美しき茨（はな）（後書き）

見事に神威達のキャラ崩壊してるな（苦笑）

ファンの方々どうもすみません！！！

たまには味方も敵も関係無いときだってある（前書き）

銀）久々の登場じゃね…？

神）そうアルな。どうせ作者の気分次第で出すか出さないか決まってるアルけどな！

銀）そーそ…
だからもしかすると今日で最後かもしれないぞ俺達の前書き、後書き出演は…。

神）まじアルか！！！
今日で最後アルか！
おい
「テスト前だってのにシャーペン持つ気のない腰抜けやろー」！！！

亜麻音
　はい…腰抜けやろーです。

神）出番無くていいから
酢昆布大量によこすネ！！

銀・亜麻音
　そこかよ！！！！！！

新）また僕出番なし……？

――END――

たまには味方も敵も関係無いときだってある

日の出が上がる。

日は山々の連なりから
ひょっこりと顔を出し
雀は鳴き
鶏は朝を告げ
犬は何度も欠伸をし
木々は揺らぐ。

そして
歌舞伎町は今日も賑わう
取り寄り爺さん婆さんは
起床が早く
颯爽と店のシャッターを開ける者や
ランニングスーツを
着こなし白い息を出しながら走る者

そんなある路地裏では
笠を被った長髪男が
新聞の記事を目を逸らさず直視していた。
男が見ている記事はデカデカと掲載されていた
「連続庶民殺人事件
裏表の顔の琲瑠袈」
と…。

「琲瑠袈が裏ではテロ活動…。なんとも…」

（だが事件解決はまだ早過ぎる。
琲瑠袈が真選組の手に殺られるのはまず確かだということは分かった。だが……
客が何故…）

「か～つら♪」
朝っぱらからの威勢の良い勇ましき声。
振り返って見れば
「貴様！四番隊の…」
四番隊隊長：連沢新羅

ここに在り。

「神妙に尾縄に付きやがれ！！」

鞘から刀を取り出す

それと同時に桂も刀を手にとろうとした。

「なーんちゃって…」

…が　新羅は刀を鞘から半分まで出したところすぐに鞘に収める

「なーんちゃって！今日はアンタは捕まえないよ！話をしに来ただけ！」

Vサイン＋ウィンクのおまけ付きに桂は「？」となる。

「もしかして貴方？

銀時に

「連続庶民殺人事件」教えたの…？」

意味深にも急に聞かれた事に状況が掴めなくなる。だが言葉の意味を知った上で

「何故俺が銀時に言った事を知っている？」

と答える。

「いや…攘夷戦争前からの旧友の仲だったら今でもその繋がりは切れてないだろうしね…。

それに…」

言葉を切る

「俺の話を聞けっ！何故俺が銀時に言っ…」

「銀時はこの事件に深く関与してるってこと…。」

「！！」

「…何故銀時が…」「あの人琲瑠袈の将官さんに依頼されたらしいのよ。家族を殺された…だから復讐がしたいって
だけど実際は琲瑠袈の仲間の仇を打つ為に銀時は利用された。

まあ、殺人事件とか呼ばれてるけど実態は異なる。　私は琲瑠袈を潰す為に動いたまで。まあ無理もないわよ。表の顔は一般って見做されてたから」

「動いた……まさかこの事件は貴様が…」

「まあそういう事ね…。
殺人事件ではなく警察としての役目を果たしたまでだけど…」

「貴様…いや連沢新羅…。では銀時と接触してるのか？」

「えぇ…かなり前から。
相変わらず…

この街を謳歌してるわよね…。

白夜叉……」！！！
目をカッと見開く。
「何故貴様がその名を！！」
「さあなんででしょうね？」
クスクスと不気味な微笑を浮かべる。
「でも一つ忠告しておくわ…
白夜叉今は平凡な毎日送ってるけど
歌舞伎町にはまだあの男を狙う奴はゴロゴロいるって事は深く
その胸に刻んどいたほうがよろしいかと。
仲間が死んだら嫌でしょ？
いくら攘夷浪士の中でも
過激派と恐れられる
鬼兵隊当主
高杉晋助…。
貴方方にとっては今なお彼は
‘仲間’
だと思ってるんでしょ？
彼が死ぬ姿だって見たくはないでしょ…。」「き…貴様。一体…」

「かつて貴方達の
恩師　吉田松陽のように大切な人をまた失いたくなければ…」

カチャー
再度刀に手をかけた。

「幕府の犬が何故俺達の恩師を知っているのかそんな事はどうでもいい。たが貴様が俺達を気に食わずして仲間に手を掛けるような真似をしようならば今この場で息のねを止める。」

穏和した面(ツラ)で
新羅はまあまあと宥める。

「これは忠告よ…。ただの」
だがまた笑い出す。本当に不気味で文字通り
　　奇妙奇天烈。

「貴様はっ…一体何を知っている！！」

「この世界の全て！！…」

「！！！」

「とか有り得る訳ないじゃん！！！アッハハハハッ…」今のフレーズの何処に坪のはまり所がある。
自分の腹を抱えながら
目に涙を浮かべ
「これ傑作〜」とか言葉零しながら、俺を嘲笑うかのような彼女の

目の前に立っている俺は一体どんな顔をすればいい？
しばらくして
目の前で爆笑している女は目に浮かべた涙を拭うとまた俺に
「今のは軽いジョーク…だから忘れ…プ……アハハハハハは…」

単なる馬鹿なのか
単なる阿呆なのか

今はそんな事はどうでもいい…。

ただ……。

「ぁ～…

……新…ぁ…

新羅ぁ～……

何処ですかー？」

桂達の居る路地裏の近辺から新羅にとって聞き慣れた声が耳に入る。
「あ…忘れてた。
朝の巡回の途中だったんだ…。」
ぽつりと言葉を吐くと
くるっと回り桂に背を向けじゃあね―言い
歩みだす。
「おい待て！まだ話は…」
「近々（きんきん）気をつけなさい。って銀時に言っておいてもらえる？
狂乱の貴公子さん♪自分に置かれた境遇を良きものとして維持しておきたいのなら四六時中自分の回りに蜘蛛の糸を張りつけておいて、自分の身は鬼の皮でも被って（おおって）防御力を高めておいたらって…」
遠回しの言い方に何を的とし言いたいのか…。
「？」も黙する。
「つまり…自分の身は自分で護れって言いたいわけ…。

今日の事は、
二人だけの秘密。
また会いましょう。

次会う時は

お互い　敵同士ってわけで。」

そのまま新羅は死角を曲がり巡回へと戻っていった。

一人路地裏

男は呟く。

「とにかく銀時のところに行くか…。」

そう言い　万事屋へ
向かう男の背中を

朝日は虚しさを抑え

乾いた空へと光を照らす。

秘密は後（のち）の噂となる（前書き）

銀）おせぇよ。

新）ほんとに

神楽）……。

亜）？？

銀）何してた。
更新もろくにしねぇで。

亜）あっあの…これには訳

銀）何！！！してた？

亜）はいっ！！！すみません！！！サボってました！サボって遊んでました！！すみません！！！まじですみませんでしたぁぁぁぁ！！！

秘密は後（のち）の噂となる

「一体どういう事だ！！！！」

「どういう事もこういう事ありゃしねぇよ…！
説明した通りだろ…。
てめぇ何回説明すれば気が済むんだ！！！」

怒り気味の溜め息を一つ零す。

話せば長い。

簡潔に言えば朝っぱらから勝手に人ん家あがってきて夢の世界にレッツ・パーリィしている人たたき起こして勝手に冷蔵庫漁って勝手にソファーに座って説明がどうやこうや言われて勝手にキレて勝手に話が進んでいたらしい。

「てめぇじゃない柱だ！！貴様の説明の仕方が悪いだけだ！！！
琲瑠袈の将官高梨とかいう奴に依頼された内容が家族の敵討ちだなんだでその依頼を請けた理由が、ジュラルミンケースにびっしりの一千万を貰ったからなどと軽いノリで受けた！！だがその金は偽金

！！！しかもその男は家族じゃなく琲瑠袈の仲間の為の仇を打つ為だけに貴様を利用しただとぉ！！！」

「だからさっきからそう言って…」

「何故それを俺に伝えなかった！！」

桂の怒鳴り声に小指を軽く耳の穴に入れ塞ぐ。

「……うっせぇーなぁ…んな一々てめぇに報告してられる程暇人じゃねぇんだよ！！学校から帰ってきた子供に「今日はどうだったの？楽しかった？」とか聞く何処ぞのお母さんかっ！てめぇは！！」

ベタな例えを桂に向かってそう早口で言うが、桂はその言葉を振り払うように

「っ貴様！命が買われたも同然の事だろ！！一歩間違えれば、貴様死んでいたんだぞ！！！今回の琲瑠袈事件は連沢新羅が犯人だったらしいが。」

「そうそ…あいつが…

……

…ん？」

銀時は自分の耳を疑った。

（こいつ今連沢新羅って言ったか？

なんで知ってる？

この事件(ヤマ)の犯人は
テレビでも新聞にも載っていなかったはず。）

「どうやら何故俺が琲瑠袈事件の犯人…すなわち
連沢新羅を知ってるのかと今思っただろ？」

「ヅラ…なんでそれを？」

「俺も聞きたいことがある。

あの女は一体何者なんだ…？」銀時も問うが、逆に桂に問われてしまった。自分の問いが綺麗さっぱりスルーされハァ…と息を漏らし仕方なく桂の問い何がだ？と聞く。

「貴様とあの女の関わりには首を突っ込みたくはないが
あの女に言われた。
「貴様か？銀時に琲瑠袈事件を教えたの？」」とな」

新羅の口調とは少し舌が滑る話だが確かに新羅は桂にそう言った。

「あいつが…？……新羅がそう言ったのか？」

「あぁ…貴様に教えた事は事実だが…何故あの女が？銀時お前が言ったのか？」

銀時は頭の奥深くまで…いや脳の奥深くまでそんな発言したか思い当たる形跡がないか回路を辿るが、

大体の事

「桂にカクカクシカジカ教えてもらったんだぁ！」
「へえ～そうなんだぁ～！」
「じゃあ桂君に銀時に教えたの？って言ってみるね～」
「うんっ！！」

アハハぁオホホぉ…
だのそんな呑気なハ●ジみたいなことは普通銀魂の主人公はしない。
事実上回路を辿ったもののそんな事を新羅に告げた覚えはない。

「いやもういい…キャラ崩れる。
なら貴様はあの女に言ってないと？」
「逆に言う理由がわからない。」

「確かに…それと銀時。あの女が言ってたのだが近々気をつけろ…
などのことをお前に伝えろと言われた」

「近々気を付けろ…？何にだ？」
眉間にしわを寄せながら、桂に問う。

「さぁ…何にかは知らないが……あの女……何故か松陽先生の事を知っていた。」

「！！！」

銀時は驚きのあまり目を丸くさせた。

「なんで…あいつが…」

「俺もそこまでは問わなかった…。」

「あいつ…俺達と同じ塾通ってたか？」

「いや…仮にそうだったとしたらあんな性悪女

俺は

嫌と言うほど目に焼き付いてるはず。

第一見た目からしてまだ未熟だ。歳は…そうだな…。まだ二十歳いっていないのではないか？

それなら話の筋交いはまずない。

俺達があの女と接触を交わすなどまず不可能…」

「……

言われて見ればそうかもな…」

そこで一旦話は終わる。

銀時と桂は

あの女こと…連沢新羅のことについてそれぞれの真理を築こうと能動した。

桂は勿論のこと、連沢新羅の事だけに脳を専念させた。
だがある男だけは違う。

銀時は―

奥平翠羽…いや
翠星石と蒼星石が

「薔薇乙女
（ローゼンメイデン）」が
そこに関係しているのではないか――――と。

縁は切れるもの？

どのくらい時間がたったであろうか？

いや時間はそれほどたっていないのか？

黙考の時間は彼等の脳裡を狂わせる。黙なる時。

爆睡している神楽の突然の寝言が彼等を脳裡から呼び覚ませる。

「…危うく睡魔に負けそうになった。」

「寝てたのかよ…。」

どうりで静かなはずだ。と銀時は胸の内で答える。

そんな中桂は銀時に告げた。

「銀時

…あいつとお前がどういう関係かは知らない。

だが…

…あの女とは縁を切れ。」桂から告げられた意外な言葉

「あの女…ただ者ではない。寧ろあの女は……

関わってはいけない匂いがする。」

「変な言い掛かりは寄せ。俺は好きであの女と関わったつもりはねぇ。」

「ならば……」

「だが…あいつには…聞かなきゃなんねぇことが山ほどある。勿論ヅラ…てめぇの言っていた近々気をつけろたぁの事もな…。」

「だが銀…」

桂の見たその目…。
その目は、力強く威儀で他人を圧迫させるかのような意志が伝わった。

返す言葉もその制圧によって押し潰される。

「分かった…。くれぐれも気をつけろ…。あの女の証言…。嫌な感じがするからな。」

「言われなくても用心するたぁ…。」

「そうか…。ならば俺はそろそろ帰るとしよう。

そう言いソファーから離れ玄関へと向かう。

「じゃあな銀時。」

「ああ…ヅラも気ぃ付けろよ…。」

「言われなくてもな…。」

その後気づく。

ヅラの背中は何故か重く見え。

お決まりの

「ヅラじゃない桂だ。」

あの台詞が無かったこと

目的？約束？そういう大事な事を忘れた時自分の無力さに気づく人は数少ない

――ねぇ――

どうして私は……

この街に来たの…？……――

私が……この街……に

来…た理…由…？

……用も無しに来た…？

……遊びにきた…？

違う…。

だったら…？

真選組に入った理由なんてないはず…。

私は用も無しにこの街

に来た…？

真選組に入った？

本当に

この街を守るため……？

……う。

治安を護るため……？

違うっ

違う違う違う！！！

私はただ…　治安なんかこんな街なんか……！！

貴方に必要あるの？

貴方は…目的を忘れている。

違う……。

忘れてなんかっ……。

ローゼンメイデンの為…？

お父様に会わせる為…？

ミーディアムだから…？

あんな

ジャンク（壊れた子）

さっさと……。

お前には関係ないっ！！！気安く私に話かけるな！！

……

……何を言ってるの？

貴方は私で……

私は貴方でしょ？

ち……

が……う。

私は……私……

だって……この身体は……

殺さないで！！！！！！！

死にたくない！！！

痛い！！！

助けてくれっ！！！

助けて！！！

当主様っっ！！！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！　助けて！！！血が…血が…

熱い熱い！！！

痛い痛い痛い

や…
……め…
て。

やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて！！！

……お嬢…様…逃…げて。

私は…

――なんで…？

――忘れてしまったの？

ねぇ……。

当主さん…。

当主…さん…？

やめて…その呼び名で私を……私を…呼ばな…いで…

私の名前はっ！！！

どうして貴方だけ…

……生きてるの？　どうして…

どうしてどうして……

どうしてどうしてどうしてど

嘆きと叫び――1番辛いのは…？

お前がっ！！！――――

「いやいやいやいやいやいや！！！！！！！」

「…ら」

「しん…ら…」

「新羅っ…」

誰かが私の名を連呼している。

一体誰…？

にしても声が大きい…

「新羅っ！！！しっかりしろ！！おいっ！」

はっと目が覚めた。

私の目の前にいるのは

「土方…さ…ん？」

鬼の副長こと土方が

私の両肩を左右激しく

揺らしていた。

そして周りを見渡すと

隊士達や局長、沖田達が私の周りに集まってとても心配そうに見ていた。
特に翠羽は……。

私は布団から
上半身だけ起きていた。
気がつけば自分のこめかみ部分に両手を当てさらに荒い息を早いテンポを繰り返しあまり酸素を吸えていない状況であった。
そして私だけが

隊長服ではなく寝巻き姿。
身体は大量の汗によってべたついており
頬を伝って落ちる汗は嫌に生暖かく布団に染み渡る。
しばらくすると荒い息も落ち着きを取り戻しハァと息を零す。

「土方さん…私…一体？」
私は土方に問う。
だが土方は

「俺も詳しくは知らねぇ。要は奥平に聞け…。」

私は翠羽に目を向け

「翠羽？」

「私と新羅が朝の巡回に出回っていた時です。
用があるとか言った新羅はそのまま１０分くらいしたらすぐに戻って来たです。
で…また一緒に巡回し始めた時、新羅が急に自分の頭抱えて苦しみだして…そのまま倒れたです。
私はすぐ隊士に連絡して屯所に連れ帰ったです。
でも新羅はそのまま意識不明のまま一日目覚める事はなかった。近藤さん達は皆昼っぱらから任務で屯所空けてて私と新羅だけココに残ってた。

私は粥を作って此処に来ようとしたその時誰かの奇声が屯所中に響いて慌てて声の発するほうにきたら新羅が何かに怯えるかのように奇声を発してて私は何十回も新羅を呼び続けた！でも新羅はずっとずっと叫び続けてた。そんな時隊士の皆や近藤さんが帰って来て私は助けを求めた

そこで
土方が貴方を……。」

そこで涙声になりだした翠羽にありがとうと言った。
そして隊士の皆にも…勿論土方達にも
「ご迷惑をかけてすみません。」そう言った。
土方は

「ったく。余計な心配懸けやがって…。」
そう溜息混じりに煙草を吸った。

近藤さんも
「びっくりしたぞ！！急に翠羽が「新羅がっ新羅っ」って抱き着いてきて…」

「抱き着いてはいないです、！！！！！！このエロ親父が！！！」
早口に拒否る。

沖田は
「大丈夫ですかィ…新羅…。土方の野郎…あんな強引に身体揺さ振ったら
出るもんも出ちまうでさぁ…。
レディーへの振る舞い方とか知らないんですかね？
可哀相な新羅でさぁ…。
まじ死ねよ土方…。」

口調が土方と名にかけた瞬間の目つきが擁に怖かった。
「おい総悟…。今すぐ表へ出ろ！！」

狭い部屋で
一瞬で宴と化す。
そんなやり取りを交わす
皆を見て思わず笑う。

「ありがとう！皆！！！」
そう笑顔で御礼を。

――お前が死ねば良かったんだ――

あの時の言葉が
走馬灯のように蘇る。

そう……。

思い出したくもない。
あの頃の記憶。

ぬるりと肌に取り付くあの液体。そしてまわりの…。

あの日…。

私は全てが

…私が

…私に

…私を

…私で

なくなった。

「新羅…俺達は今から任務に行ってくる。屯所を開けるがお前が見

張っていろ。」

「えっ！！でも私…」

「仕事だなんだで疲労が溜まってるんだろう…
今のお前が行ったところで浪士共に斬られるだけだ。今日は安静にしておけ…。」

「まっ待って下さい！！！私は大丈夫です！そんな心配いりません！！それに私は四番隊隊…」

「これは副長命令じゃねぇ！局長命令だ！！！」

近藤さんを見ると
相変わらずの無双な笑顔。
「頼むよ新羅…。お前は確かに隊長としての役目を果たしている。だがたまには自分の身体を休めることも隊長としての役目でもあんだよ。」

「……分かり…ました。」
さすがに私達の長　近藤さんの直々の令によればそれはそう逆らえ

ない。

「大丈夫です新羅。貴方の変わりは私が勤めますから！」

翠羽はそう優しく言いかけた。私はよろしくとだけ伝えた

「じゃあ行ってくる」

近藤さんと土方に続き、翠羽は私に手を振り隊士は私に一礼をして部屋を出て行った。

古びた渡り廊下をギシギシと歩く音。

始めは大きかったが次第に静寂となり。

やがて無音…。屯所からでていった証拠

虫の囀りさえ聞こえない。

静寂だけが走る。

障子の隙間から差し込む光――――月光―

その光だけが

彼女を美しく着飾らせる。

あの日の
　記憶を消し去る
かのように
新羅はゆっくりと布団から起き上がり
隊服に着替える。
腰に真剣を差し
　屯所を後にした。
足が止まらない。
止まれない。
行かなければならない。

もう歌舞伎町から遠く離れたことが一目で分かる。ターミナルが点状になっていたからだ

向かった場所（先）は

――［立ち入り禁止］――

立入禁止の貼紙が何十枚もの張り巡らせて
入らせる者を拒むかのように柵が邪魔をする。

柵と柵の間から見える景色は暗くて良く見えない

…が

月光で少し分かる。

古びた家々
昨日使っていた
雰囲気を漂わせる井戸
茂みの中の自転車
外側に蔓が伸びた家

回らない水車

くらいしか分からなかった。

だが
長年放置されたこの村にも

あの日のままのものもあった。

生き物が焼け焦げたかのような臭

葉に…
…木々に付着して
固まったままの血。

そして

自分の足元に
転がる白骨。

今だ腐ってない
死体も二体三体この目で確認した。

これは

祝福なのだろうか…？

あの日を忘れさせない為の

神は

そんな私に

贈り物を
授けたのだろうか？

私を

幸せの道に進めさせない為の

不当の贈り物を――――

「どうですか？久々の故郷は……」

「！！！」若い男性の透き通るような声

その方向に目だけを向けた
木の真上に立つ三日月を背景とした凛々しい姿―
頭に小さなシルクハットを乗せ
タキシードを纏う
何処かの執事なのか？
ただ
その姿はいかにも
人間などという姿ではなかった。

――兎――

確かに兎の顔――

――目は赤く

耳も長い――

「ラプラスの魔…」

兎が二足方向したら誰だってドン引きｏｒ唖然ｏｒ退く（前書き）

更新遅くなってしまいまことにすみません

兎が二足方向したら誰だってドン引きｏｒ唖然ｏｒ退く

「ラプラスの魔…」

木の真上にいた兎は地面に静かに着地した。

ゆっくり新羅の元へ歩み寄る

「私に何の用…？私じゃなくて
あの娘達に用があるんじゃないの？」

あの娘達とは
薔薇乙女（ローゼンメイデン）を表す

ふと兎は足を止めた。

「あんなガラクタ共など眼中にございません。ネジを巻いただけの
操り人形」

「あっそう…」
笑顔で隠してあるがかなり彼女はキレている。
彼女がミーディアムということを知っておきながら。

「で…何しに

というかその前に
貴方が此処へ私を誘ったのでしょう？

わざわざあんな惨たらしい夢見させて…」

兎は短く笑った。

「話の御理解が早くてこちら側としては有り難い。過去の見物と致しましてはちょうどあのような夢が最適かと。」

相っ変わらず虫酸が走るわムカつくわヘドが出るわ糞兎が…。

「へぇ…」

「本題といきましょう。これをご覧に…。」
ラプラスの魔が片手を開くと
光輪を伴った結晶が出て来る。

「そっそれはっ！
ローザミスティカ！！」
ローゼンメイデンの心臓に当たる部分
――ローザミスティカ
それを何故に馬鹿兎が持っている？
「そのローザミスティカ…。誰の…それも…二つ…」
「第6ドール雛苺
そして
第2ドール金糸雀（カナリア）」
「！！！！！！」
新羅は目を大きく開いた。
「待って！！雛苺のローザミスティカは水銀燈が持ってい…いや奪

われた…。それをなんで貴方がっ！」
そう雛苺がゴミ捨て場に捨てられていた時に雛苺のローザミスティカは存在していた…だがあの水銀燈に奪われた。

「金糸雀あの子…なんで…」
金糸雀が

恐れた事態がとうとう起きてしまった。

第2のアリスゲームの敗者

――一体誰が？

「第一ドール水銀燈は誤って第二ドールのローザミスティカを手放してしまった。雛苺のローザミスティカはあの人形が嫌いなのでしょうか？私の元へ飛んできましたよ。」

「あ…りえない。貴方何をしたの？」

「人聞きの悪いミーディアムだ。

これは忠告です。

「歯車は止まらない。
時間(とき)は動き出す。
針は巡り廻ってやがて
頂上へと刺す。

事態は一変し
壊れ壊れの現実世界で生きる為には
王の命に従うしかない。」

「何が言いたい…」

「連沢新羅…時は待ってくれないのです。
貴方がミーディアムで
私は兎。

だったら

ミーディアム（自分）の
立場として沖介の役目を果たしなさい。

あのコンビニ事件の時
私が何故貴方に白夜叉に

忠告させたか分かりますか？」

「？」

「いずれ敗者は
数多く在（え）る事となる。
事態は大きく歪んだ。
これですぐにゲームはまた新たな展開を迎えることでしょう。壊れたもの同士の…

…そしてより強き者を求める旅が…。」
」

「その強き者というのが、
桂と銀時ってわけ……。

でもあの人達は
ローゼンメイデンと
契約させる訳にはいかないこれ以上ローゼンメイデン同士争わさせない為にも
彼等自身にも…」

「ミーディアムとしてそれが正しいと思うのなら
ゲームの行き先はそちら側に傾くことでしょう。

おっと時間だ…。

また漂うこととしましょう次会う時の敗者は誰なのか？見物です。」

「っ！！待ちなさい！ラプラス！！！」

兎は突然切り開いた空間の中に入りその場から消えた。

「なんで…ローザミスティカが……。」

その頃

――nのフィールド内――

空間と空間の狭間と呼ばれるフィールド内で兎は飛んでいた。

「さあ新羅…
お前に残された選択肢は3つだ。

一つは
　ミーディアムとして
　アリスを目指す人形に力を貸すか？

二つ目は
　ミーディアムとして

ではなく

その躯(うつわ)を
　ローゼンメイデンに
乗っ取られるか？

三つ目は
　この街にきた目的…
自我の目的を最優先に

復讐という道を選ぶか…」

ドクンッ――

彼女の中で

何かがうごめきだした。

それが

人間なのか？

獣なのか？

我々には知る術もない。

機嫌損ねたままの人はお先真っ暗な人生辿ることになるかもしれないよ

――翌朝――

夜明けと共に聞こえてくる罵り声は屯所から――

爽やかな朝なぞと今の屯所では有り得ない状況に陥っていた。

「ったくこの馬鹿女がっ！あれほど屯所を見張ってろと…身体を休めとけって局長から言われてたのに！！」

少々御立腹な翠羽。仁王立ち姿で腕を組み

見下ろす先は―

「いやぁだからそれは自販機に用があっただけで…」

翠羽の機嫌を宥めようとする

布団から上半身起き上がらせる新羅。ただその新羅は

右腕に

ギプスを嵌めていた。

そう昨日の―

ラプラスの魔という兎に呼び出されたあの晩の帰り道
人通りの多い公道も夜ではすっからかんのからっぽな道になっていた。そんな道をただ一人新羅は独り占めするように歩いていた。

が

それもつかの間
　　その路地裏から
浪士が何人もの現れ

油断していた新羅に
一人の浪士が斬り掛かった

辛うじて背中は斬られずに済んだが
利き腕の右腕を斬られてしまった。

その浪士達はすぐにその場から立ち去ったらしく
新羅も重傷を負って
のこのこと屯所に戻れば
先に任務から帰っていた
真選組一行に…特に翠羽に怒られたという。

それで済むなら有り難いが朝の稽古をする為起きた瞬間にも異様な
オーラを後ろに纏わり付けながらビッチ食らってるというのが
今の状況。

だが新羅も翠羽に言えないことは多々あるのだ。

さすがに新羅もミーディアムといえど

ラプラスの魔と会ったこと

金糸雀がアリスゲームの第二の敗者となってしまったこと
今この場で言ったら翠羽の存在が真選組に割れてしまう故
翠羽の機嫌をさらに損ねてしまう為。心配させないためにも
皆には「自販機でジュース買っていたらいきなり襲われて斬られた」
と嘘の供述を述べといた。

「大の警察がなんて不様な格好で屯所(ここ)へ帰ってきたのですか！！！
斬られたぁ？
背中は斬られず済んだ？
心臓ぶち抜かれず済んだ？んな言ってる場合ですか！！！
鍛練は怠るなと！自分の身は自分で護れと昔母ちゃんに教えられなかったですか！！！」

「はいすみません。」
今は機嫌を損ねさせない為に言うことは聞いておこうと素直に謝る。

「まあ今回は右腕で済んだ…って右腕って貴方の利き腕じゃないですかっ！！！どうすんですかこれからっ！食える物も食えないじゃないですか！！！
ア〝ァせめて左腕
だったらぁぁ！！！」

翠羽は人一倍頑固者な反面人一倍優しい人形……いやここは人間と呼ぶべきなのだろうか？

「とにかくです！
今日の朝の巡回は翠羽一人で行くです！絶対動かないでくださいよ！動いたら…」

あの時から既に

「はいはいっ分かりましたっ！」

耳元で鳴る音

「じゃぁ行ってくるです！絶対に動かないでくださいよ！！！」

二回目の忠告

でもそれは

―警告の鐘―

「分かってるわよ！気をつけてね」

敵はもうすぐ側まで

―近寄ってきてる―って

警告のサイレンは思いも寄らぬ場所で聞こえる

正午になる３０分前―

屯所内の食堂は
隊士達で溢れ返りその分
賑やかではあった。

沖田は食事中の土方とは
距離を置き一人
「蕨人形」を作っていた。

土方はいつもの
ＭＹマヨネーズを丼一杯隠れる程に乗せその一部始終を見ていた山
崎が吐き気が止まらずついには厠へ行くハメになったり、若干退き

気味に見ていた隊士に「食うか？」とマヨ丼を差し出された瞬間厠へ飛び急ぐ隊士達が続出していたりと

なんやかんやと騒々しさが増すばかりであった。

新羅は自室で睡眠をとっていた。妙なことに隊士が起こしにいっても起きなかったが近藤が今日は多めに見ようと言った為寝させたまんま

昼に近い時刻に迫る。

これが沖田の場合であったら普通なのかもしれないが

近藤は食堂にはいなかった

ずっと

自室で帰りを待っていた

そう　　翠羽が

朝の巡回から
かなり時間がたっているのにも関わらず

戻って来ない。

もしものことがあったらと考えると

溜息の数も増えるばかり

「心配するこたねぇよ、近藤さん」

「トシ…」

後ろを向かんでも
声だけでわかる。

長年の付き合いだからだろうか？

「近藤さんも早く飯を食ったらどうだ？腹の虫が喚くぞ」

「ふっ一人のか弱い隊士の帰りが心配で食う気も無くすってもんだな」

ふぅ―と煙草の煙をはく

「奥平のことか？あいつの何処がか弱いんだか。
糞生意気で自己中で頑固もんで気取り女…全くプラスな誠心持たないクソ餓鬼。どうやればあんな性格曲がりな女に育つんだか？親の顔が見てみたいわ。」

再び煙草の煙を勢いよくはく。

「ハッハハハ！！！そんなの張本人に言ってみろ！噛み付かれるぞ」

「だったら都合が良い。噛み付かれる前にあの生意気口叩く口を縫えば良いだけの話だ！」

「さすが鬼の副長だな」

「まあそういうことだ。近藤さんは心配しすぎなだけだ。どうせまたどっかで団子食ってるやら道草してるやらだろ。少なくとも新羅はそう思ってるはずだ。」

「新羅…あいつ目覚ましたか？」

近藤は少し顔を歪めた

「いいやまるで死人みたいにぴくりとも動かねぇ。

まあちゃんと息はしてるけどな」

「だと良いんだが

女隊士二人の状況が状況だからな。心配でたまんねぇんだよ！この陰気臭い場所で唯一頼りになるのがあの二人だからな。全く世話の焼ける子猫ちゃん達だ！！！」

「・・・・・」

「えぇーそこなんでちょっと引き気味なのォォォ！！トシっ！！俺なんかいやらしい事言ったねぇ！！！」

「うん言った。」

「局長ォォォォ！！！！！副長ォォォォ！！！！！！！大変ですぅ！！！！！！」

一人の若い隊士が慌てた素振りで二人の元に駆け寄る！

「おいどうした？そんなに慌てて！」

隊士の顔は焦りと恐怖が合わさった表情で顔色も血の気が引き真っ青だった

「たっ大変です！！！！！隊長が！！！！奥平隊長が！！！！」

―春雨戦艦内部―

阿伏兎は操縦席に立っていた。
部下共から連絡があり来てみれば

“地球”のすぐ側まで来ていた。様々な列島が見え何より海の青が
全てを包みこんでおり
なにうえ

“美しい”

「何処に見とれてんの？」
変わらず脳天気な声が後ろから聞こえそちらに視線を向けた

「団長ォ」

「やっ！」

右手を広げ万遍な笑みで手を振る

「何だよ団長
あんたは別に
来なくても良かったんだぜあんたはあっちでエビフライでもたべてな」

「何だよ阿伏兎ォ俺がいつも飯ばっか食ってるみたいな言い方〜」

「いや当たってるだろ！」
苦笑いしつつ小さな溜息をつく

「まあいいやそれより阿伏兎
面白いデータが取れたんだ」

神威の持つ左手には少し皺のついた二枚の紙を持っていた

「へぇ…あんたが調べたのか？」

「うん！手掛かりが少ないんじゃ早く銀髪のお侍さんに会えないから、俺がある程度の情報集めといた。」

阿伏兎は表は真顔、裏では唖然とした顔をしていた。進んで仕事を熟そうとする姿など長年一緒に行動した中で見たことがなかったのに今日初めて自分から率先垂範仕事をした。その事に対して驚きの顔を隠せない。むしろこんな日を拝める日が来る事があまりにも奇跡に近い。

「それも結構面白いデータも取れたし居場所も判明した。」
「マジかよ！？あんたもやるときゃやるんだねぇ。それを毎日の積

み重ねにして貰うとこっちも有り難いんだけど！」

「次から阿伏兎がやってねぇ」神威が阿伏兎に二枚の紙を渡す。一枚目には証明写真とプロフィール的なものが書いてあった。

その情報の中で

今最も必要なのが

「園原羅音」の現在地

居場所が分からなくては意味がない。

目で辿っていくと

「はぁ…江戸じゃなくてかなり街外れの村じゃねぇかよ…。」

すると操縦席の脇に寄り掛かり部下に

「この村に行き先変こ…」

「じゃなくて阿伏兎！！！ちゃんと見て！一枚目の紙」

神威に指摘され再度一枚目の紙を目で辿る。

スッ―と神威の指がある

情報が書いてある元へ伸びた。その情報を見て阿伏兎の顔が驚きに包まれる。

「お…おいおいこれって…」

「んで次の紙見て！！」

一枚目と二枚目を入れ替えた。二枚目にも一枚目と同じ証明写真と

プロフィールが書いてあった。

だが二つ

二つだけ

一枚目とは異なる文面だった。

「これで分かった？」

「てこたぁ二枚目が…」

「そういうこと！」

「ねぇ操縦席に座ってる人！」

「はい！」

威勢の良い返事を部下する

「行き先ね

“歌舞伎町”
にしてもらえるかな？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4957x/

薔薇獄少女

2012年1月15日02時48分発行